

目指すは海の果て

ワンピの風

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

これは、麦わらの一味の副船長の物語。

目

次

目覚め

能力と弟

ルフィ

救出

悪童四人組

修行兼金策

果てを望む

愛（暴力）

A
S
L
L

奪還

95 86 74 61 54 46 33 23 12 1

目覚め

「うぎや——!!」

たつた今頭をぶつけて前世を思い出したので、いきなりだが自己紹介をしようと思う。

俺の前世は令和の時代を生きたごく普通の日本人。トラックに轢かれて意識を失い、この世界に転生した。神様らしき人物とはエンカウントしなかつたので、いわゆる転生特典とやらは貰っていない。

今世での名前はルーク。現在3歳。今お世話になつているのは、コルボ山の山賊ダダン一家。0歳の時からここにいると、俺より3歳年上のエースが教えてくれた。……もう分かると思うが、ここはかの有名なONE PIECEの世界だ。とは言つても、俺は漫画を一通り読みはしたが、主要人物の顔を覚えている程度なので、この世界を冒險することになつてもあまりあてには出来ないだろう。うわあああ、もし俺がこの世界に転生すると分かつていたならもつとちゃんと漫画を読み漁ったのにいい！

「ルーク！ 大丈夫か！」

名を呼ばれ、俺は考え事を中断した。記憶を思い出した衝撃が強すぎて忘れていたが、今俺はエースと川に釣りをしに来ていたんだつた。

「だいじょう……」

顔を上げた俺の視界いっぱいに、大口を開けたワニが映つた。
……え？

「ぎやあああああ！ エース助けてえええ！」

記憶取り戻して速攻喰られて死亡とか笑えないからああ！！

悲鳴を上げていると、バコオン！ という音がして、ワニのガバリと開いた口が何かに叩きつけられたかのように物凄い勢いで閉じた。

「ルークに何してんだてめえ！」

やだ、イケメン……!! 信じられるか、この人これで6歳なんだぜ？

ワニはどうやら鉄パイプで頭を強打されたらしく、そのまま動かなくなつた。気絶ではなく、間違いなく絶命している。ワニを一撃で屠つた6歳児はそのままこちらに歩いてくると、尻もちをついたままの俺の手を掴み、引っ張り起こしてくれた。

「あ、ありがと」

「おう。魚は釣れなかつたけど、もつといいもんが釣れたな。今夜はワニ飯で決定だ」
エースは嬉しそうにワニを眺めてそう言つた。

ダダン一家での俺とエースの食事は、基本的に一日一回、茶碗一杯の米とコップ一杯の水が保証されている。

これ以外に何か食べなければ、それは自分で調達してこなければならない。しかし、調達した食材は山賊たちに分け前を渡すことで食卓に並ぶ。なので、腹いっぱい食べたければ分け前を引かれてても大丈夫なくらいの量が必要になつてくる。もちろん俺は腹いっぱい食べたい。

俺もこれでもこの世界で3年生きている。小さい動物なら問題なく狩れるし、食べてもいい植物もエースに習いながらではあるが大体分かるようになつたので、最近はダダンから課せられる家事をほっぽりだしてエースと一緒に森に出かけている。……前世では到底考えられないだろう。記憶を思い出した今、そんな自分に戦々恐々としている。適応力ってすごいね。

今日はエースの仕留めたワニと、俺が仕留めたウサギが2羽、それから二人で採取してきたキノコが食卓に並んでいる。分け前分を引いてもまだまだ量があるので、これら腹いっぱい食べられるだろう。

ウサギを丸焼きにした柔らかい肉を頬ばつていると、エースが、米とワニの肉を混ぜ合わせて炊いた「ワニ飯」を茶碗に山盛りにしてやつてきた。そのまま茶碗を突き出さ

れる。

「ほら、お前の分だ」

「でもこれ、エースが仕留めたやつじやねえのか？ 僕が食つてもいいの？」

「お前が囮になつてくれたから倒せたんだよ。遠慮してねえで食え」

ぶつきらぼうに言い、そっぽを向いたエース。何て優しいのだろう。もしかしたらエース的には年下の俺に兄貴風を吹かせたい年頃なのかもしれない。かわいいかよ。

正直、ワニ飯は俺の好物なので嬉しい。ありがたく頂戴した。そのワニ飯の美味さにひとしきり狂喜乱舞した後、我に返つた俺は自分の皿に乗つていたウサギ肉をエースに差し出した。

「このウサギ、エースと一緒に作つた畳に掛かつてたんだ」

「いや、おれは」

「一緒に食おう！」

「……しょーがねえなあ」

にかつと笑顔を浮かべて言えば、流石のエースも断れなかつたのか、しょーがねえなあとか言いながらも、嬉しそうな様子でウサギ肉にガブリと噛みついた。

俺は前世では両親が早くに他界していて、一人暮らしが長かつたので食事はいつも一人だつた。その時食べていたものと比べれば、この肉よりもっと贅沢だつたけど、美味

しさは断然この肉が上だ。誰かと一緒に食べるだけで、こんなにも違いが出るものなんか。

エースと二人、並んでウサギ肉をもぐもぐした後、腹いっぱい食べさせいか急に眠気が襲ってきたので、その日は速めに寝た。

家族つて、いいなあ。

眠りに落ちるその前に、そうほんやりと思つた一日だつた。

そんなこんな過ごしていのうちに、俺は5歳になつた。その頃の俺には新しい友達が出来ていた。エースが紹介してくれたサボという少年だ。彼は不確か^{グレィ・タリミナル}な物の終着駅に住んでいると聞いた。

最近はその3人で町に出かけ、町のチンピラから金を巻き上げたり、レストランで食い逃げしたりしている。最初は……まあ、少しばかり罪悪感があつたが、もう慣れてしまつた。慣れって怖いね。俺の精神も大分この世界に染まつてきていると思う。

もうね、今世での俺のモットーは「人生楽しんだ者勝ち」で決定だ。じやないとこの世界ではやつてられない。

俺たちのいるこの国の名は「ゴア王国」。ゴミ一つないことから東の海^{イーストブルー}で最も美しい

国だと言われている。確かに城壁で囲まれた壁内はきれいだが、それは毎日大量に出るゴミを、壁の外——不確かな物の終着駅、通称「ゴミ山」に押しやつっているからだ。まあそのゴミを漁つて生活している人もいるから、俺的にはちょっと複雑な気分。

唯一壁の内側へと行ける通路は「大門」と呼ばれていて、大門をくぐるとすぐに「端町」はしまちに出る。端町は町の不良やチンピラが屯している場所で、もつと奥に進むと小綺麗な「中心街」。更にその中心に高い壁があり、その中には王族と貴族が暮らす「高町」がある。

今日の俺たちは端町で片つ端からチンピラを襲い、金を巻き上げていた。

「おらあつ、それ寄越せ！」

「ぎやああつ!?」

エースがぶん回した鉄パイプがチンピラの顔にクリーンヒットしたのを、そこらに転がっていた樽の上に座つて眺めていると、隣に来たサボが金貨の入つた袋を嬉しそうにじやらりと揺らした。

「今日も結構集まつたな。いい感じだ」

「うん。幾らくらいになるかな。……あ、おかえりエース」

手で持つていた札束をサボが持つ袋の中に放り込んでいると、エースが小さな箱を抱えて戻ってきた。

「それ何?」

「さあ? さつきの奴が持つてた。中身はまだ見てねえが……。とりあえず、帰つてから開けるぞ。急げ、そろそろ人が集まってきた」

確かに、先程から少し人が増えてきてる。捕まらないうちに逃げた方がよさそうだ。俺たちは今回の戦利品を手にさつさと端町を出た。

不確定物の終着駅（グレイン・ターミナル）を出て少し森に入つたところの「中間の森」に、俺たちは來ていた。そこには大きな木がたくさん生えていて、そのうちの一本に俺たちは金を貯め込んでいた。この金は将来の為に貯めている「海賊貯金」だ。エースとサボは将来海賊になりたいらしい。俺は将来何になるかはまだ決め切れていないが、二人は俺の意思を尊重すると言つてくれている。優しい兄たちだ。

木に登り、中心をくりぬいて開けたスペースに札束や金貨、宝石類をどんどん入れていく。毎日少しずつではあるが、順調に溜まっていく貯金に満足していると、サボがそわそわしながら言つた。

「なあ、さつきの箱の中身見てみようぜ! 何が入つてんのか気になる」

「ああ。……ちょっと待て、意外と固いぞこの箱つ!」

エースが思いつきり叩いても割れない。この箱、思いのほか頑丈にできてるらし

い。すこし手加減しながら鉄パイプで殴ると、箱が壊れ、小さな果物が転がり出てきた。

「何だ、これ？ 梨？」

見た目は果物だ。前世でも見たことのある、梨だ。ただ、実の表面に走る模様が問題だつた。実の全体が薄くひび割れていて、半分が赤、もう半分が青に染まつていて。見るからにやばい見た目だつた。サボとエースは恐る恐るその実をつついたり、匂いを嗅いだりしている。

しかし、俺はそれどころじゃなかつた。流石の俺でも、ONE—PIECEに登場するおかしな見た目の果実には心当たりがある。

……これつてもしかして、悪魔の実つてやつじやね？

「これ、色すげえけど食えんのか？ どうする……？」

「いや、どう見ても駄目だろ。多分これ腐つてるぞ……。これは捨てよ——つてルーグ！」

俺は果実を遠くに投げ捨てようとしたエースからそれを奪い取つた。原作ではエースは確か……メラメラ？ の能力者だつた。サボは分からぬが……。

とりあえず、俺は二人に尋ねた。

「これ、俺が貰つてもいい？」

「いや、そりや別に構わねえけど……」

「腹壊すと云えから、間違つても食うなよ？」

二人とも「腹が減つてゐるなら代わりに食えるやつ探してくるから」と言つてくれる。ごめん、二人とも。別に腹が減つてゐるわけじやないんだ。でも……!!

俺の二つ目のモットーは「疑わしきは食つてみろ」。これまで毒に当たり腹を壊した回数は数知れず。しかし、このモットーは俺の味覚に多大な変化をもたらし、今では口に含むだけでそれが食べても大丈夫なものかわかるようになりつつある。我ながらこれまでよく死ななかつたな、俺。

二人はそんな俺のモットーを知つてゐるからこそ、不安げな顔をしてゐる。しかし、その俺の勘が當つてゐるのだ。「食え」と。なら俺は、それに従うのみ……!!
「あああああ?!」

俺は二人の静止を振り切り、果実に思い切りかぶり付いた。ふむふむ、感触は完全に梨だな。^{?!}シヤキシヤキしている。味は——
「うぶつ?!」

「うぶつ?!」

未だかつて経験したことのない不味さに悶絶する。吐き出しそうになるのを堪え、何とか飲みこんだ。それだけで途方もない疲労感を感じた俺は、その場にガクリと両手をつく。

「バカ野郎！ やつぱ腐つてたんじやねえか！」

「おいつ大丈夫かルーク！ さつきの吐け！ 腹壊すぞ！」

背中を擦られ、俺はえずきながらも何とか顔を上げて言つた。

「く、口直しをおおえええ……！」

後味がしつこく口に残つている。「吐け！ 吐け！」としきりに聞こえてくるが、今吐いたらもう一度あの地獄を味わうことになる。それだけは御免だつたので首をフルフル振りながら「今吐いたら死ぬ……！」と訴えると、吐かせることを諦めたのか、エースが干し肉を差し出してきた。

夢中でその肉を頬張る。塩の味が濃いのが幸いして、果実の後味はすぐに薄れていった。

「おい、平氣か？」

「ごめん、ありがと。落ち着いた……って」

ぐつたりしていると頭をエースに叩かれた。ちょっと痛いが、これは俺のせいだし、エースが俺を叩くのは俺を心配しての行動なので甘んじて受け入れる。

「お前エ！ 食うなつて言つただろうが！」

「こらエース！ 気持ちはわかる！ わかるけど、具合悪い時に頭叩いたら駄目だぞ！」

「ごめん、二人とも。つい気になつて……」

「いいか？ なんかちよつとでも具合悪くなつたら絶対おれたちに言え！ いいな？」

「ハイ……」

過保護なエースに思わず笑みが浮かびそうになるが、ここで笑うと暫く口をきいても
らえなくなりそうなので我慢する。多分サボにはバレバレだつたと思うが、彼も苦笑い
を浮かべただけで黙つてくれた。

能力と弟

あの時俺が食べたのは、予想していた通り悪魔の実だつた。能力は、手で触れたものを「破壊」することと、「創造」すること。簡単に言えば「壊す」とことと「造る」ことだな。実の名前までは分からぬが、割と強い能力だ、と思う。だが、どの程度まで「壊せる」のか、どの程度まで「造れる」のか。それがまだはつきりしていない。

今日はサボとエースが俺の能力の確認を手伝ってくれた。二人は俺の能力に最初は目を剥いて驚いていたが、それがあの果実を食べたせいで気づいてからは積極的に手伝ってくれている。色々と責任を感じてくれているのかもしれないが、これは俺が望んだことなのでそんなに気にしなくともいいんだけどね。二人の気遣いがとても嬉しく感じてしまう。

「じゃ、これ壊してみろよ」

エースが渡してきた拳大の大きさの石を、力を込めて両手で握りしめる。すると、パチパチという静電気に似た音とともに、両手に小さな赤い光が走る。この光、「壊す」時

には赤色、「造る」時には青色になる。右手で赤、左手で青の光を走らせて少し遊んでみたが、まるで電気を手に纏っているみたいでカッコいいので、俺は結構気に入っている。「んぐぐぎぎ……!!」

大体5秒ほど握っていると、拳大の石に赤い亀裂が入り、ばらばらと碎けて小石になつた。ため息をついて、その場に座り込む。これだけですごく疲れた。

「うーん……壊すのはいいけど、造るのは下手くそだな、ルーグ」

サボが、俺がさつきそちらの地面から造った小さな机を見てそう言つた。確かに、足の長さがバラバラで、机の天板はボコボコとへこみが多い。

「……俺、どちらかと言うと壊す方が得意かも。壊すのはさ、「壊れろ！」って思うだけでいいけど、造るのはその造りたいものを強くイメージしないといけないし……」

言いながら、手に乗つっていた小石をそちら辺に置くと、おもむろに地面に両手を突いた。青い光が走り、今度は10秒ほどしてからバチバチ音を立てて椅子が出来上がつた。不格好だが、さつき造った机よりはまだちゃんとした椅子に見える。

今の俺はこれぐらいが能力の限界だ。多分この力も、使い続けていけばもつと色々出来るようになると思う。

「何はどうあれ、練習あるのみだな……」

「にしてもすげえな。ちゃんと椅子に見えるぞ、これ」

よつこいしょ、とその椅子に腰を下ろしたエースが、どすんと尻餅をついた。

「……」
「……」

この椅子の材質は地面。つまりただの脆い土だ。エースの体重を支え切れるほどの耐久性はなかつたらしい。椅子だつた土の上で、エースは何も言わない。俺もサボも何も言わない。

我慢しろ。ここで笑つたら何されるかわからないぞ。

「……ぶつ」

「ちょ、駄目だつてサボ、俺だつて我慢して——ぶふつ」

口に力を入れて必死に笑いを堪えていたが、サボが吹き出してしまった。俺もそれにつられてしまう。

「なあに笑つてんだア!!」

「うわあつ、逃げ——!?」

結局、その日はエースにあちこち追い掛け回されて終わつた。

能力者になつてから2年が経ち、俺は7歳、エースとサボは10歳になつていた。

俺も少しずつではあるが能力を扱えるようになってきた。具体的には、「破壊」で壁の一部を崩して通り道を作ったり、「創造」でちょっとした足場を造ったり。最近はちゃんとしたイメージが掴めるようになつてきたので、何かを「破壊」、「創造」する時に掛かる時間も短くなつてきている。

ただ、「破壊」の方が「創造」よりも得意なので、どうしてもそつちばかり使つてしまふ。まあそのお陰でコントロールはバツチリだけど。

今日は俺もエースも機嫌が良かつた。前々から目をつけていた大きな野牛を、ついに俺とエースの二人で仕留めたのだ。今日は御馳走だ！　と二人で野牛を引きずつて帰つていると、何やらダダンの家辺りが騒がしい。

「何だ？」

「さあ？　誰か来たのかも……じいちゃんかな？」

ダダンの声に、ごくたまに俺たちの顔を見に来る暴力ジジイ^{ガ'ジジイ}の声。それに紛れて、少年の抗議するような声が聞こえる。

……あれつ、もしかして。

ダダンの家に到着してみると、そこには向かい合つて何かを言い争うダダンとじいちゃんの姿があつた。そして、その近くには麦わら帽子を被つた一人の少年が。間違い

ない、原作主人公のルフィだ。

「か、勘弁してくださいよ、ただでさえエースとルークの面倒見てるだけで参つてゐるのに、それに加えてアンタの孫つて……っ！」

結構な言われようだな、俺たち。

ちよつぴり悲しくなつたが、自分でも悪ガキの自覚があるので黙つておく。

ルフィは俺とエースにはまだ気づいていない様子で、キヨロキヨロと辺りを見回している。

「なあエース、あいつ、多分俺と同じくらいだよな……」

「…………」

野牛の上に座つているエースを見上げたが、彼は何故か無言のまま、じつとルフィを睨みつけていた。

あー…………。エースは何というか……繩張り意識じやないけど、見知らぬ人に対しても警戒心がとても強い。「お前は狼か！」と言いたくなるほどに強い。俺が一度、不確かかな物の終着駅で知り合つた氣のいいおっさんと話していた時も、ずっと気を張つていたし。仲間意識が芽生えた相手にはとても甘くなるんだけどね。

「…………ペつ」

「あつ！ ああ～～～～」

どうしようか悩んでいると、エースが唾を吐いた。止める暇もなかつた。目で追つてみると、唾はルフィの頬に着弾した。それに気づかないわけもなく、ルフィがこちらを見る。

「おいっ！誰だお前ら！」

「おお、一人とも。久しぶりじゃの！　おいルフィ、あいつがエースじや。歳はお前よりも3つ上。で、もう一人がルーク。お前と同い年じや」

「へえ、俺とルフィは同い年なのかな。へええく……じゃない。どうしよう、今のところエースは敵愾心丸出しだし、ルフィも唾をつけられて怒つてる。

「今日からこいつらと一緒に暮らすんじや。仲良うせい！」

じいちゃんがルフィの頭をパシンと叩きながら言つた言葉に、ダダンが悲鳴を上げる。

「決定ですか!?」

「…………何じやい」

「お預かりしますっ!!」

じいちゃんが出した威圧に、一瞬でルフィを預かることを承諾したダダン。見ていて少し不憫になつた。今度からはもう少し言うことを聞くようにようかな。

「よし！　じいちゃんは帰るぞ、ルフィ！　エースもルークも、また来るからの!!」

そう言い残すと、じいちゃんは笑いながら山を下りて行つた。
諦めたようなため息をついたダダンが家の中に戻つていくので、俺とエースも野牛を
引きずつて家に入った。後からついてくるルフィは、不機嫌そうに俺たちを睨んだままで。

どうせこれから一緒に暮らすんだ。だつたら仲良くしたい。

俺はむくれた顔をしたルフィに声をかけた。

「えーと……ルフィ、でいいんだよな？」

「！」

「俺はルーク。さつきはごめんな。エースは気難しいだけで、根は良い奴なんだよ」

謝りつつ、エースのフオローを入れておく。たちまちギロリとエースからの睨みが飛
んでくるので、それに謝意を込めた苦笑で返した。ごめんごめん、そんなに睨むなつて。
ルフィはむくれた顔のまま、数秒俺の顔を見つめていたが、やがてニカツと破顔した。

「……謝つたから許す！　おれはルフィだ！」

「うん、よろしく」

「うわあ、素直くつ！」

これまでダダン一家でも、エースやサボの中でも俺が一番年下だったので、弟が出来
たような感じがして胸がほっこりする。いや、歳は一緒なんだけどさ。

家に戻つて少しすると、食事の時間になつた。食卓には俺とエースが狩つてきた野牛の肉が並んでいる。やはり牛の肉は美味しい。幾らでも食べられそうだ。

「おれ、山賊大つ嫌いなんだ!!」

「黙れクソガキ！ あたしらだつておめえみたいなの預けられて迷惑してんだ！ ここに居たくなきや好都合！ 出てつてその辺で野垂れ死んじまえ!!」

肉汁溢れる焼きたての肉を口いっぱいに頬ばつ正在と、荒ぶるダダンとルフイの会話が聞こえてくる。

「メシ食い足りねえ。おれもあるの肉食いてえ！」

「黙れクソガキ！ あの肉もこの肉もエースとルークが獲つてきた野牛の肉だ!! あたしらに分け前を渡すことでこうして食卓に並ぶんだよ！ 何か食いたかつたら自分で獲つてきなア!!」

こうやつて聞いてると中々厳しい環境で生きてきたよな、俺たち……。

ダダンがルフイにしてもらう予定の仕事（掃除・洗濯・靴磨き・武器磨き・窃盗・略奪・サギ・人殺しのとんでもないラインナップ）をルフイに言い聞かせ、ルフイが「わかつた！」と即答しているのを聞きながらチラリと左隣のエースの様子を伺う。

「……」

無言で肉を頬ばるエース。ただ、その眉間に深いしわが寄つていて、目には鋭い光が宿つている。その様子はただ食事に夢中になつてゐるというわけではなさそうで、明らかにルフィを意識しているのがわかる。それとは別に前々から思つていたことではあるが、基本的にエースはダダンの家にいる間もピリピリと気を張つてゐるように感じる。まあダダン一家からも俺たちは基本腫れ物扱いなので、それも無理もないけど……。

俺が見ている先で、エースは一足先に食事を終えると、さつさと家を出ようとする。それに目ざとく気づいたルフィが後を追いかけようとするので、俺は慌ててルフィを呼び止めた。今のエースは不機嫌だ。あんまりルフィと一緒にいるのはよくないかもしない。

「ルフィ！ この肉食わないか!?」

「え？ いいのか!?」

「俺、腹いっぱいだから！」

そう言つて肉を幾つか差し出すと、ルフィはとても嬉しそうにその肉を受け取つた。腹いっぱいなんて嘘だ。正直まだ食い足りないが、肉よりもエースのほうが大事だ。

ルフィの後ろで、ダダンたちが俺の行動を見て目を剥いている。俺が肉を誰かに分け

たことが意外だつたのだろう。それにしても少し驚きすぎな気もするけど。

「ありがとう！　お前いい奴だなー！」

「まあね。よく噛んで食えよ？」

少し心苦しいが、ルフィイガ肉に氣を取られている間に、俺もこつそり家を抜け出す。エースは少し先の方を歩いていたので、すぐに追いついた。

「エース！」

「…………ルークか」

幸い、呼び掛けるとちゃんと返事をしてくれた。そのことに安堵しながら、隣と一緒に歩く。

「どうしたんだよ、ちょっと警戒しすぎじゃないか？」

「…………」

うーん、やっぱり不機嫌だ。無視されたが、めげずにもう一度呼び掛けてみる。

「エース～？」

「…………」

「…………こちよ」

脇腹をくすぐつてみるが、ペつとその腕を振り払われた。今のも効果なし、かあ。

「ちょっと話したけど、そんなに悪い奴じやなさそうだぞ？」

「……そ、うかよ」

「……
そ、うだよ」

駄目だ。俺はエースが思いのほか頑固なのを知っている。こうなつては、エースがル
フイを何らかの形で認めない限りはどうにもならないだろう。どうなるかわからない
けど……見守るしかないな。

長期戦を覚悟し、俺は小さくため息をついた。

ルフイ

ルフイに対してのエースの態度を、警戒心を抜きにして言葉で表すと、「鬱陶しい」が適切だろう。

「中間の森」の木の上で、町で得た金品を穴の中に隠しながら俺はそう考えた。その場にぼんやりと寝つ転がる。エースからすればルフイは「ついてこられると邪魔」「あと單純に気に入らない奴」。そんな感じだろうか。

ルフイはよく頑張っていると思う。エースに谷に突き落とされ、一週間狼に追い掛け回され、傷だらけになつてもエースについていくのをやめないし、俺でもあまり通ろうと思わない場所でも、迷いなくエースについていく。ルフイが来た初日に「山賊が嫌い」と言つていたが、その言葉通りダダンたちといるのがよっぽど嫌なんだろう。毎日どんなに傷だらけになつてもルフイは追いかけることを辞めない。その根性には素直に感心する。もうここにルフイが辿り着くのも時間の問題だろう。

そしていつも、ルフイは何故か俺を追いかけようとはしなかった。俺がわざとエース

と時間をずらしているのもあるかもしけないけど、いつも追いかけるのはエースだけだ。

「ルフィ、俺じやなくてエースだけを追いかけるのは何でだ？」

いつかの夜、エースを追つて怪我をしたところにグルグルと包帯を巻いてやりながら聞いてみたところ、

「ルークとはもう友達だからいいんだ。おれは一人じゃねえ。でも、おれはエースとも友達になりたいんだ！」

とのこと。通る道は違えども、俺の行き先が最終的にはエースと同じ場所だということを知っているのかどうかはともかく、エースを追いかけるのには目的があつたわけだ。「友達になりたい」という目的が。

……ちよつと健気すぎません？　俺つて今のところルフィに肉あげただけなのに、それだけでもう友達なの？　今時こんなにピュアな子いないよ？　もう俺が「中間の森」までの道教えちゃつてもいいかな？

何度かそう思つたが、それを教えてしまうとこれまでのルフィの頑張りが水の泡だし、俺もエースに睨まれるだけでは済まなさそうだ。何より、あそこには「海賊貯金」がある。これまでの様子を見て、「海賊貯金」の存在を知つたルフィがそれを誰かに話すとは思えないが、だからといって嘘や誤魔化しが出来るようには見えない。多分、誤魔化

そうとはしてくれるんだろうけど、あのピュアっぷりだ。誤魔化せる可能性は限りなくゼロに近い。

「…………うーん」

普段の俺だつたら「なるようになるさ！」とか言つて割り切つていたかもしれないが、こればっかりは、俺だけの問題じやない。3人で苦労して貯めた大切な貯金……。

「う、うくくくん!!」

頭を抱えて呻いていると、たんつと軽やかな足音がして、ふつと頭上に影が差した。見なくても分かる。サボだ。もう町に行つてきたのだろう、重そうな袋を担いでいた。

「なーに唸つてんだ、ルーグ？」

「うんにゃ、ちよつと考え方…………」

「またあれか、ルフィつてやつのことか？」

「うん……結構巻き上げてきたな」

「ああ」と嬉しそうに答えたサボが、じやらじやらと今日の戦利品を木の穴に入れていぐ音がする。

「そのルフィつてやつだけど、お前がそこまで気にかけてるんだ。悪い奴じやないんだろ？」

「うん。ただ、ちよつと素直すぎるんだよなあ…………嘘とかつけないタイプ」

「んん、そうか。……エースは相変わらずか?」

「変わりなし。むしろ、俺がルフィに良くしてるのがんまり気に食わないみたい」

最近のエースは俺に対してもちよつぴり不機嫌だ。サボが諫めてくれてはいるけど、そろそろ寂しいので機嫌を直してほしい。

「アソツも素直じやないからなあ……エースに懐いてたお前が、最近は何だかんだルフィの世話焼いてばつかだから面白くないんだろ」

「え、なにそれ」

思わぬ言葉にむくりと起き上がる。サボは少し苦笑氣味に「今の、エースには内緒な」と口の前で人差し指を立てた。何だ、それで機嫌が悪かったのか、エースは。

「…………おい、からかうと怒りだすからな。やめとけよ」

「わかってるつて!」

えへへへ？ もへへへ？ かわいすぎだろ、俺の兄。表情筋に力が入らない。きつと今俺の顔は緩みまくっているはずだ。ちよつと今日からは暫くエースに付きまとうことになった。というかサボ大人すぎないか？ ちよつとびっくりしたぞ。

「サボ！ ルーク！ いるか!?」

ゴロゴロ転がっていると、下から声が聞こえた。件のエース君の登場だ。

「いますよー！」

くだん

飛び起きてから声を投げかけると、怪訝な顔をしたエースがスルスルと木を登つてくる。

「わりい、遅くなつた。……何でルークはそんなに上機嫌なんだ？」

「んー……さあな、おれにもわかんねえ」

サボがそう言いながら、意味ありげに片眉を上げた。その顔は少しニヤついている。俺とサボの顔を見たエースが一步後ずさつた。

「何だよ、二人して気持ちわりい顔しやがつて。何かあつたのか？」

辛辣だなオイ。思わず真顔でサボと顔を見合わせてしまつたじやないか。

「んー？ 別に何もないんですけど？」

「？ そうか。それより、見ろよこれ！」

エースがこれまで重そうな袋を俺たちの前に置く。その中には大量の札束と金貨が入つっていた。これまで一番の金額かもしない。

「!? うわあ、すげえ！ おれよりすげえ！ 大金だぞ！? どうしたんだこんなに」

「大門のそばでよ、チンピラ達から奪つてやつた!! どつかの商船の運び屋かもな」

「商船か……俺も次からは運び屋を狙おうかな」

何人も襲つて少額の金を奪うより、一人だけ狙つてドカンと大金を奪うのであれば効率もいい。次のターゲットを探す場所は大門のそばで決定だ。ムン、と気合を入れてい

ると、サボが笑つて言う。

「もう結構貯まってきたけど、幾らぐらいあれば海賊船なんて買えるんだろうなー!」
「2億とか? 船の相場なんて正直全くわからんけど」

実際幾らぐらいなんだろうか、船って。想像もつかないので適当な金額を言つてみたが、別に笑われたりはしなかつた。エースもサボも、船の相場は知らないらしい。ちよつとこれからは本とかを読んで勉強してみようかな。いやそもそもダダンの家には本がない。結局は町で集めるしかなさそうだ。

「さあなア。早くしまえよ、誰に見られるかわからねえ……」

「海賊船!? お前ら海賊になんのか!?」

突然、木の下から無邪気な声が聞こえてきた。この声は、ルフィだ。そろそろ来るとは思っていたが、まさか今日来るとは思つてなかつた。

「「?」「!」」

「おれも同じだよ!!」

下を覗いてみると、ぶんぶん手を振るルフィの姿が。バツチリこつちを見上げている。

とりあえず木から降りると、ルフィは俺も一緒にいるとは思つていなかつたのか「あれ、ルーク!? お前もここに来てたのか!」と驚いていた。「うん」と短く答えながらも、

俺は気が気じやなかつた。なぜつて、後ろにいるエースの機嫌が最高に悪くなつていくのがわかつたからだ。

「お前がルフィだな？ 二人から話は聞いてるぞ」

「どうどうここまでついてきやがつたのか……人が通れるような道は通つてねえのに」エースのその言葉に、サボがルフィをまじまじと観察する。身体にある幾つもの傷に気づいたのだろう。サボの顔に少し感心したような笑みが浮かんだ。

「お前、意外とタフなんだな……そんで、エースについていくだけの度胸と根性もある」「？ お前誰だ？」

「おれはサボ。ルークとエースの友達だ」

「うなのか！ ジヤあおれとも友達になろう！ おれはルフィだ！」

ふんふん、見た感じサボとルフィの相性は悪くなさそうだ。お互いに名乗りあう二人の様子は朗らかで、俺としてはこのまま仲良くしてほしい。

エースがそれを見て面白くなさそうに顔を聾めた。その時。

「おい、森の中から声が聞こえたぞ！ 子どもの声だ！」

「探せ！ お前らがやられたっていうガキかもしけねえ……」

「「!?」」

誰かのそんな声が聞こえてきて、俺たちは一齊に口を噤んだ。ルフィだけが、「何だ？」

どうしたんだよ?」と呑気に首を傾げている。

何故子どもが探されているのか、理由はわからない。が、このあたりで知られている子どもと言えば、それは俺かエース、サボの三人だけだ。奴らが探している「子ども」は十中八九、俺たちの中にいる可能性が高い。

「マズイ、ここにいたらおれたちの宝が見つかっちゃう……!! オイ急げ、こつちだ!」慌てた俺たちが、少し離れた場所に群生している茂みに身を隠すのと、声の主が木々の間から姿を現したのはほぼ同時だつた。

四人の男だ。そのうちの三人は怪我をしたのかあちこちに包帯を巻いている。最後の一人——シミターを片手にぶら下げる大柄な男が、声に不快感を滲ませて言つた。
「エース、サボ、ルーク……ここいらじや有名なガキだ。お前らから金を奪つたのは、そ
のエースで間違いねえんだな?」

「はい……情けねえ話です。油断しました」

「呆れたガキだぜ。ウチの海賊団の金に手エつけるとはな……!! これがブルージャム
船長の耳に入つたら……おれもお前らも命はねえぞ」

ブルージャムとは、少し前からこの島にいる海賊団の船長の名だ。今は
不確かな物の終着駅の「海賊の入り江」に船を泊めている。
じやあつまり、エースが手を出した金はブルージャムのだつたつてことか……!

「……やべえ金に手エ出しちまつた！」

「しようがないさ、大金持つて無防備にウロチョロしてるとが悪い。襲つてくれつて言つてるようなもんだし。とりあえず俺たちは、ほとぼりが冷めるまで身を隠そう」エースの肩を叩いて励ます。エースと同じ立場だつたら、俺も間違いなく襲つてしまふだろう。カモがネギ背負つて歩いてくるみたいなものだ、見逃すなんてことはできない。仕方のないことだ。今回はちよつと相手が悪かつただけさ。

「ルーク、お前最初は食い逃げにすら罪悪感持つてたのに、随分成長したな……！」ちよつと感動したようにエースが目を潤ませるものだから、俺は少し誇らしくなつて胸を張つた。俺だつて日々成長してゐるんだ！

「いや、おれが言うのも何だけどよ、人としては最低だからな、それ」サボが何か言つているが、聞こえなかつたふりをした。

「ま、まあそれは置いておくとして…………。見ろよ、手下のポルシェーミだ！ 知つて

るか、あいつ、戦つて負けたやつの頭の皮を生きたまま剥ぐんだ！」

「まじか!? 絶対捕まりたくねエ……あれ、おいあのチビはどこ行つた!?

その言葉に慌てて茂み周辺を確認するも、どこにもルフィの姿が見当たらない。一体どこに――?

「あ」

エースの視線が一点に向けられ、止まつた。つられて俺とサボもそちらを見る。そこには、ポルシェーミに首根っこを掴まれたルフィイの姿が。

「放せ——!! こんなやろ———!!」

「何だこのガキ?」

「何で捕まつてんだよ———!!! おかしいだろ、ついさつきまで俺の隣にいだらうが!? 何をどうしたら捕まるんだよ?!?!」「助けてくれ———エース———!!」

「ちよつ!! ここでエースの名前呼ぶのはアウトだぞルフィ! 恐いのはわかるけどさあ!

案の定、ポルシェーミはルフィイが何か情報を持つていると思つたのか、ルフィイをどこかへ連れて行つてしまつた。

救出

ルフィが連れていかれて暫くした後、俺たちは茂みから出た。

「おい、あいつが『中間の森』のこと喋つたら、今回の金だけじゃねえ。おれたちで集めた宝、丸ごと全部持つてかれちまうぞ!!」

焦燥を滲ませた声でエースが続ける。

「いつ来るかわからねえんだ！ 早く宝を別の場所に移してしまわねえと！」

大急ぎで俺もサボも緊急用にと準備していた袋に宝を詰める。が、連れていかれたルフィのことが頭から離れない。ルフィは連れていかれた先で、一体どうなるのか。口を割つて助かるのであればまだいい。だけど、捕まつた相手はポルシェーミだ。口を割つたからと言つて何もせずに逃がしたりはしないだろう。

それに、万が一ルフィが口を割らなかつた場合は……。

「……？ どうしたルーク。急がねえと」

自然と手が止まつた。訝しげな顔をしたサボが俺を急かすが、考え事に夢中で頭に

入つてこない。

万が一、じゃない。原作をほんやりとしか知らない俺でも、あいつがどんな性格かは、ルフィイがダダンの家に来てからのこの三ヶ月で、嫌というほど知っている。

「……ルフィイは、絶対口を割らない」

「お前それ、何を根拠に」

「根拠はない。ないけど、わかるんだ。ルフィイは、エースと友達になりたがつてたから。それに、もう同じ金の飯を食つた仲だ。ほつとけない」

俺がそう言うと、二人とも作業の手を止めて黙り込んだ。難しい顔をしている。長年かけて貯めた海賊貯金だ。このままにしておくのも危険だ。宝はやはりどこか安全な所に運ばなければいけない。

俺は口を軽く噛んだ。

……何も、真っ向から戦うわけじゃない。俺はまだ7歳のガキだが、いざとなれば能力もあるし、一人でも敵の目をかいくぐつてルフィイを助けることくらいは出来る筈だ。

二人は宝を移してて、と言いかけたその時。

「おれとルークで行く。サボは宝を隠しといてくれ」

「わかつた」

「!? エース?」

驚いてエースの顔を凝視すると、少し気まずそうな顔をした後に、ぼそりと呟きが聞こえた。

「……お前一人じや危ねえからな。それに、今回の件はブルージャムの金に手を出したおれのせいでもある」

「素直になれよ、エース。お前もルフィのこと、ちょっとは気にかけてたんだろ？」

「だまれ」

茶化すようなサボの声にぴしゃりと言い返したエースは、近くに置いてあつた俺の鉄パイプを渡してくる。俺がそれをしつかり受け取つたのを確認して、エースも自分の鉄パイプを拾い上げた。

「こつちは任せとけ！ ちゃんと隠しとくからよ」

「うん。サボ、ありがとう」

木の上からぐつとサムズアップしてくるサボに手を振つて答えてから、俺はエースに向き直る。

「ありがとう、エース」

正直、一人は心細かつたので、エースが一緒に来てくれるのはとても心強い。鬼に金棒だ。（本人が気にするのでエースの前では「鬼」というワードは出さないようにしているが、この時ほどこの諺ことわざがぴつたりだと思ったことはない。）というか、エースもルフィ

を気にかけてはいたんだね。普段のルフィへの態度が容赦なさすぎて全く気づかなかつた。

「礼はいい……せつさとあいつ取り返すぞ」

「おう！」

俺たちは、ポルシェーミたちが消えていった不確かな物の終着駅グレイ・ターミナル、そこに住む人間たちの言葉で言うところの「ゴミ山」に向かつた。

道の途中でガラクタを漁つていたおっさんたちにポルシェーミの行方を聞くと、すぐに教えてくれた。

「ポルシェーミの野郎なら、あっちの方に行つたぜ。武器持つてたから氣イつけなあ」「ありがと！」

ゴミ山に住んでいる住民たちは、こんな環境だから助け合いながら生きているので、仲間意識が強く、よそ者には敵対心が強い傾向にある。そして、悪ガキと呼ばれている俺たちにも仲間意識が働いているのか、意外と親切な人が多かつたりする。まあ、普通に危ない奴もいるけど。

「ルフィのやつ……殴られてるだけならいいけど」

「？　いやダメだろ」

「？　あ、そつか。エースは知らないんだつけ？　ルフィは「ゴムゴムの実」ってやつを食べて、ゴム人間になつたんだって。だから、打撃は効かないみたい」

本人から許可を貰つて頬つぺたを引つ張つたり、殴つてみたりしたから間違いない。というかルフィつていつから能力者だつたんだろう。えーと……確かに赤髪のシャンクスと一緒にいる時に食べたんだよな。

「ゴム人間!?　そうか、だから谷に落ちても死ななかつたのか…………お前とはまた違う能力なんだな」

「うん。俺が谷に落ちたら普通に死ぬ」

落ちてる最中に壁に取つ掛かりを造れたら助かるかもしれないけど、落ちながら造るほど俺の創造スピードは速くない。こう考えると、ルフィつて高所落下のダメージがないから凄いよなあ。……じゃない！　今はルフィだ。ずれた思考を軌道修正する。

「あいつはシミターを持つてた。だから……」「……急ぐぞ」

俺が口を噤んだ先を、エースも考えたんだろう。
走る速度を上げて、俺たちはゴミ山を駆け抜ける。

「麦わら帽子のガキ？ それならポルシェーミが向こうに連れてつたぞ」
親切な人から話を聞きながらあちこち走り回り、ついたのは、このゴミ山にしては少し大きめな建物。周囲に人だかりが出来ていたのですぐにわかつた。

「このガキ！ いい加減口を割りやがれ!!」

「痛てえよおおお！ 助けてくれ——!!」

苛立つたようなポルシェーミの声と、ルフィのバカでかい悲鳴が聞こえる。良かつた、最悪殺されてるかもって思つてたけど、まだ大声を出す元気はあるみたいだ。でもだからといって安心出来る状況ではない。エースがギリリと歯を噛みしめた音が聞こえる。

「あいつ……行くぞ！ おれから離れんなよ、ルーク！」

そう言つてエースが建物に突っ込んでいくので、俺はエースの手を掴んだ。

「ちょっと待つて」

「？」

「念の為、仕掛けをね……ふん！」

俺は建物にそろそろと近づくと、壁に手を着く。小さな赤い光がパチパチと弾けた。

中にいる人数が定かではないので、一応何時でもこの建物を崩せる様に、建物の壁面だけを少しづつ破壊していく。目安としては、壁が天井を支えきれなくなるギリギリくらいまでだ。こうしておけば脱出時にポルシェーミ達が追いかけてきても、壁に衝撃を与えるなりすれば脆くした壁は崩れるはずなので、建物の下敷きにして足止めできる。ちょこつと触るだけでこのくらいの大きさの建物を壊せるのが将来的な俺の理想だが、今の俺には無理なので、こうやつてちまちま仕込みをして壊すしかない。

小声でエースに説明すると「おお……お前すぐえ事考えるな」と感心していた。しかしその直後、エースが壁をちらりと見上げて眉を寄せる。

「それはいいんだけどよ、もうそろそろ辞めとけよ。この壁、反対側はゴミの寄せ集めだからあんまり壊し過ぎると——」

ビキツ、ミシミシミシ……！

「あつ」

慌てて手を離すが、遅かつた。俺たちが見守る中、目の前の建物の壁に、大きな亀裂が入っていく。

その亀裂はみるみるうちに壁全体に広がり——

ドオオオーーン……!!

未だポルシェーミやその部下達、そしてルフイを建物中に残したまま、それなりに大きかつた建物がゴミ山に轟音を響かせて倒壊した。

「あーあ☆」

「バカ野郎!!」

周囲のゴミ山の住民たちがワーウーと逃げ回る中で、珍しく焦つた様子のエースに頭を叩かれながら俺が現実逃避していると、倒壊し、ただのゴミと化した建物跡の一部から、見覚えのある麦わら帽子が見えた。一瞬で覚醒し、そばに駆け寄る。

「つ！ ルフイ！」

「ゲホッ、うえつほ！」

瓦礫を蹴散らし、エースと二人でルフイを引っ張り出す。身体を引っ張った時の感触にエースが目を剥いていた。ゴム人間だとは教えたが、本当に伸びたことにびっくりし

たんだろう。

「大丈夫か!?」

涙目で咳き込むルフィの身体をさつと確認した。あちこち血が滲んでいるが、命に関わるような怪我はない。涙で顔がぐちやぐちやになつていたので軽く拭つてやる。

「もう大丈夫だ。よく頑張つたなルフィ！」

「ルークウウ……エーブ……ヴウ……!!」

「へによへによ言うのは後にしろ！ ルーカ、先導頼めるか？」

「オーライ、任せろ！」

エースがルフィを背負つたので、俺がエースの分の鉄パイプを持つ。倒壊の衝撃で舞い上がつた土煙を突つ切つていると、瓦礫から起き上がりろうとするシルエットが見えた。ポルシェーミだ。

「はいおやすみイ！」

「ぶるまつ!?」

こちらの姿が視認される前に鉄パイプ二刀流で殴りつけておく。シルエットの動きを見るに、そのまま意識を失つたようだ。グツナイ、いい夢を。

「うううええええ……！」

「うるせえ、落とすぞ！」

前方を警戒しながら走っていると、後ろから二人の声が聞こえてきて、微笑ましい気持ちになる。

建物から聞こえてきたポルシェーミヒルフィのやり取りで明らかになつたが、ルフィはやはり口を割らなかつた。

そのことがエースの信頼を勝ち取つたのだろう。口は少々……いやかなり悪いが、エースは何だかんだ言つて面倒見がいい優しいやつだ。そしてルフィはとても素直だ。二人の相性は良いと思う。きっとこれから仲良くなれるだろう。

「せつかく助けに来たのに、落として帰つたら意味がないよ、エース？」

「がああ、黙つてろルーク！　おい、いつまで泣いてんだ！　おれは泣き虫は嫌いなんだ！」

「うんん……！」

「お？！」

ず、と鼻を啜つて泣き止んだルフィ。やつぱり素直だよなあ。エースも一度だけ「フン」と鼻を鳴らすと、ルフィをしつかり背負い直した。

未だ土煙がもうもうと立ち込める中、俺たちはゴミ山を後にした。

「どういうこつたこりやあ!! エース、ルーク、ルフィ!! 誰だコイツは!!? 何でガキがもう一匹増えてんだよ!!」

「家族が増えるのって、とつても喜ばしい事だと俺は思うけど」

「黙れルーク!! お前だけはまだマトモな方だと思つてたのによお!!」

「あは!!」

「何笑つてんだぶつ飛ばすぞ!!」

俺たちはダダンの家に帰ってきた。サボも一緒に。

ゴミ山から帰還した俺たちと合流したサボは、まだ宝を新しい場所に移し終えていなかつた。なので、途中からではあるが俺とエース、そしてルフィも宝運びに参加し、日が暮れる頃にようやく運び終えた。ルフィが口を割らなかつたおかげで、追手は来ず、安全に宝を運ぶことが出来た。

エース、サボ、ルフィ、そして俺は、今回の件で本格的にブルージャムの一昧に命を狙われる事になるだろう。先にブルージャムの金に手を出したのは俺たちだし、これはしようがないよね。

まあそれでも俺とエースとルフィはこのコルボ山に住んでいるので問題ない。しか

し、サボが一人で住んでいるのはゴミ山だ。そしてゴミ山はブルージャムの縄張りの範囲内。流石にそこで暮らすのは危険なので、ここに連れてきた。

ダダンは激おこだが、ここ以外に安全な所はないので、悪いけどこれは決定事項だ。それに俺たちの中ではサボが一番コミュ力が高いので、山賊一家の中でも上手くやつていけるだろう。

「よう！ ダダンだろ？ おれはサボ」

ほら。挨拶だつてちゃんと出来る。ルフィとの邂逅^{かいこう}一番に睡を飛ばしたエースとは大違ひだ。

「サボ!? 知つてるよその名前。おめえもよつぽどのクソガキだと聞いてるよ!!」

「そうか……おれもダダンはクソババアだと聞いてるよ！」

「余計な情報持つてんじやねエよ!!」

「何だ、もう仲良しじゃないか。心配して損した」

「おめえは一体何を見聞きしてそう判断してんのかい、ルーク!?!」

俺はひらひら手を振つてダダンの叫びを受け流す。そして、サボに手を差し出した。

「改めて、これからもよろしくな、サボ」

「おう！ こつちこそよろしく、ルーク」

そう言つてサボは満面の笑みを浮かべた。

悪童四人組

「食い逃げだああ〜!! 誰かそこのガキを捕まえてくれ!」

中心街に男の必死な声が響く。が、俺たち四人を捕まえようとする大人はいない。何故つて?

「どけどけ、邪魔だア!」

先頭を走るエースが人を殺しそうな声と表情で周囲を威嚇しているからである。荒事に慣れていない中心街の住民たちはその威嚇に怯え、サッと道を開ける。

大の人気が怯える程の圧力を周囲に与えているエースの隣にはサボ。彼も鋭い目つきで周囲の人たちを睨みつけている。そしてその後ろにルフィと俺が続く。もちろん全員、鉄パイプで武装している。

「オラどけカス共! その首叩き折るぞ!!」

……うん、どこのチンピラかな?

ルフィもエースを真似て威嚇しようとしているが、上手い言葉が出てこないらしい。先程からずつと「バカ! アーホ!」と繰り返している。ルフィはちょっと語彙力が貧

相だということが判明した。

そのまま休む事なく街とゴミ山を走りぬけ、あつと言う間にコルボ山についた。新しい宝の隠し場所で、俺たちは足を止める。

「ゼー、ゼー、ゲホツ」

「おーい、大丈夫か？」

ルフィも体力が増えてきたのか、最近は俺たちのペースについて来れている。ただ、ここまでぶつ通しで走ってきたのは流石に堪えたらしく、苦しそうだ。

背中を擦つてやりながら、俺も息を整えた。最初は辛いもんな、わかるわかる。しかもこれは食い逃げだ。走るのは食事後の逃げる時だし、タイミングとしては最悪である。これに馴れてしまった俺の胃は大丈夫だろうか。

「おれも最初の頃は辛かつたけど、一回慣れたら平気になるからな」

「ルフィは鍛え方が足りねえんだよ。胃を刺激しない走り方を覚えりやこんなの楽勝だ」

サボとエースは平氣そうだ。ぴんぴんした様子でそう宣のたまつた。そんな二人を尻目に、ルフィは苦しげに口を押さえている。

…………というか、胃を刺激しない走り方つて何?? 初めて聞きましたけど。

「おいおい。次行く時は留守番しとくか?」

「……!!」

エースの問いに、口を押さえながらも首をぶんぶん振ったルフィから、か細い声が漏れる。

「次、は……肉！」

……。

今にもリバースしそうな状態で食べ物のことを考えられるとは思つてなかつた俺たちは、思わず真顔で視線を交わした。間違いなく、ルフィの食い意地はこの四人の中でもトップだ。

「……そうだな、次は肉にしような」

「……ああ！」

優しくサボが笑いかけると、ルフィが元気を取り戻した。いや回復早つや。どんだけ肉好きなの!? もしかして胃が強いのか。それともメンタルが強いのか。いや多分両方だな、うんきつとそうだ。

これまで三人組だつた俺たちだが、ルフィが新しく増え四人組になつたということです、街ではちょっとした話題になつていてるらしい。夕食後、風呂をダダンに借りている

時にサボが教えてくれた。

「今じゃ『悪童四人組』って言われてるらしいぞ、おれたち」

「へえ……」

身体を洗い終えた俺は、風呂桶に張つてあるお湯に浸かっていた。普段よりも柔らかい雰囲気が俺たちの間に漂つている。皆リラックスした様子で、思い思いにくつろいでいた。

ちなみにこの桶は、俺が造つたものだ。元々あつた風呂桶は少し古くなつていたので、古いやつを参考にしながら新しい風呂桶を造つてみた。水が漏れたりしないように、じっくり時間をかけて造つたので、割といい出来だ。これにはダダンも喜んでいたし、俺も満足している。今度はジョッキとかも造つてみようかな。

そんなことを考えながらお湯にのんびり浸かつていると、どうしても気が抜けてしまう。

「……あ、ちょっとガボボボ」

ついでに力も抜けた。ぶくぶくと身体がお湯に沈んでいく。

「おめえは毎回毎回……！」

溺れかけた俺をエースが引き上げてくれる。風呂のたびに溺れるので、皆もうすっかり慣れてしまつた様子だ。ちょっと申し訳ないけど、目の前にお湯が張つてあつたらどう。

うしても入りたくなる。日本人の名残りかな。

ちなみに、ルフィは石鹼で床を滑つて遊んでいる。前に俺も一緒にやつてみたが、トリプルアクセルを決めようとして転び、お腹を擦りむいてしまったので即やめた。あの時はお湯が沁みて、とてもお湯を楽しむどころじゃなかつた。もう二度とやらない。擦り傷つてどうしてあんなに沁みるの？ わけがわからないよ。

「はあ～……」

お湯の温かさがじんわりと疲れた身体に広がっていく。その感覚を味わいながら目を閉じる。ああ、これぞまさに至福の時だ。

「ルーク、お前つて風呂好きだよな。毎回死にかけてるくせに」

「やかましいわ。俺だつて好きで溺れてるんじやねえやい！ 風呂は大好きなんだけどな……能力者だし、こればっかりはしようがない」

悪魔の実を食べるとカナヅチになる。この話は有名だ。俺は実を食べる前までは泳ぎは得意だつたが、食べてからは全く泳げなくなつてしまつた。泳ごうとしても力が抜けてしまうのだ。雨を浴びても力が抜けたりはしないが、海水や川の水、お湯などに全身浸かるとどうしても力が抜けてしまう。

「まあ、泳げなくなる代わりに能力が使えるようになるんだから、イーブンかな。なあ、そこんところ、ルフィはどうなの？」

多分ルフィも泳げなくなつたとはいえ、悪魔の実を食べたことは後悔してないんだろ
うな。打撃が効かないって何かと便利だしね。

そう思い、俺はもう一人の能力者であるルフィの方を見たが、ついさつきまで石鹼で
床を滑つて遊んでいた筈のルフィは、いつの間にお湯に浸かつたのかは知らんが、静か
に溺れていた。

「……」

気づいたサボが、無言でルフィを引き上げる。

「ぶふあ！ 死ぬかと思った……ありがとうサボ」

「おう。……次からはもう少し騒がしく溺れてくれ

「わかった！」

騒がしく溺れてくれつて……いや、でもわかるよ、サボ。静かに溺れられたら気づか
ないもんな。ここは先輩である俺が、ちゃんとルフィに教えないと……！

俺は湯の中で腕を組み、厳かな声を作つてルフィに語りかけた。

「ヘイ、ルフィ。君は俺を見習うべきだ。なんてつたつてこの俺は、救出（された）回数
100超えのベテラン。助けてもらうことにかけて、俺以上の者はいない！」

「言つて恥ずかしくねえのかそれ……」

「むしろお前がルフィを見習え。ルフィは毎回溺れたりしねえぞ」

「ひやい……」

轟沈した。いや、俺も途中からちよつと「あれ?」つて思つたもん。俺、情けなさ過ぎ……?

放心状態で背を風呂桶の縁に預けていると、ルフィイが隣にやつてきた。何が面白いのか「にしし!」と笑つてゐる。なーに笑つてんだ、こんなにやろめ。

「みよーんみよーーん、うわすつげえ伸びるんだけど……痛くないの?」
 「ひひやくにえーぞ!^{ねえ}^ゾ

「ほーん、じやあどんだけ伸ばせるかやつてみていい?」

「んん!」

風呂桶から出ても、ルフィイのほつペはまだまだ伸びる。ルフィイのほつペたの限界を目指して引つ張つてゐると。

「あつ」

俺の足が何かを踏んづけ、滑つた。恐らく床に落ちていた石鹼だろう。その場に尻もちをついた俺は、うつかり手を離してしまつた。ばぢいん!! ともの凄い音を立ててルフィイのほつペたが戻つた。

「うつわ! ごめんルフィイ!」

戦々恐々としながらルフィイの顔を覗き込むと、平氣そうにしている。ええー、いや凄

いけど。

そんなこんなして遊んでいると、風呂場の窓の外から、香ばしい香りが漂つて來た。
こ、この香りは……

「肉だ！」

「待て！　ただの肉じやねえ。この香りは……野牛のヒレ肉だな？　それも超絶レアな
部位であるシャドーブリアンを焼いてやがる!!」
「ダダンの奴ら、さては隠してたな？　おれたちがいない間に一番美味しいところをス
テーキにして食うつもりだぞ！　許せねえつつ!!」

「君らの嗅覚は一体どうなつているの??」

口々に叫びながら、俺以外の三人は外へ駆け出していった。すっぽんぽんのまま。
待つて。ねえ待つて。色々ツツコみたいところが多くすぎて軽くパニックだ。部位の匂
いなんて俺全然わかんないよ。ホントにアイツらの嗅覚はどうなつてんの?? そりや
あ、肉を焼いてる匂いだつてのは俺もわかつたけどさ。というか……

「せめてタオルぐらい巻いていけよ!!」

自分の腰にしつかりとタオルを巻きつけ、三枚のタオルを手にした俺は馬鹿共を追い
かけた。

修行兼金策

「うーん……」

俺は一人で唸つていた。場所はダダンの家。今日はもう風呂を済ませたので、あとは寝るだけだ。エース達は近くで枕投げをしている。後で混ざる。

目の前には、能力を使う練習として造つた握りこぶし大の木彫りの置物がある。……正確には『彫つた』わけじやないから木彫りと言つてもいいのかは微妙なところ。まあそれはどうでもいい。

狼をチョイスしてみたんだけど、まだまだ細部が荒い。細かく造り直していくと、まあ満足する出来になつた。

「わ、それ狼か？ 上手いな」

枕投げで戦死したサボが俺が造つた狼を見て褒めてくれた。普通に嬉しいけれど……。

「なんか、茶色一色つて寂しくない？ まあ、材料が木だからしようがないんだけどさ」「お前らなんの話してんだ？」

休戦したらしいエースとルフイが合流してきた。俺の手元の狼を見て、二人とも目を輝かせる。

「これ、能力で造ったのか？　すげえ！」

「ルーク、お前こんなに細かいもの造れるようになつたのか。順調に上達してきてんじゃねえか？」

「ありがと二人とも。自分でも上達してきてるとは思うけどさ。茶色だけってなんか寂しいから、目の色だけでも変えようと思つて」

「絵の具……はここには無いもんなあ」

四人で考える。「木の実を潰して汁をつける！」とルフイが元気よく叫んだ。次いでエースが「血で染める」と真顔で言つた。木の実か。悪くはなさそうだけど、変色するかもしれないし……あ、ごめんけど血は論外。殺伐としそうでしょ。

ふて寝したエースをルフィとサボが慰めてる。ちょっと見てて面白い。

「いつそ宝石とか埋め込んでみるかなあ……」

寝転がつて、天井を眺めながら呟いた。…………待つて、普通にありだな。それを売ればもしかしたら良い金になるかもしれない。俺は飛び起きて、大部屋で酒を飲んでいたダダンに突撃した。

「ダダン、宝石二つ持つてない？」

「ああ～？ お前にやるような宝石はないよ。ガキはとつとと寝な！」

「これの目にしたいんだ」

「無視してんじやねえよっ！ つて……」

俺が手に乗せた狼の置物を見せると、ダダンは静かになつた。まじまじと狼の置物を見つめている。

「これもお前の能力で造つたってのか？」

「うん」

「……色は決めてんのかい？」

「決めてない」

おもむろにダダンが腰のポーチに手を突っ込んで、宝石を掴みだした。手のひらには大小様々な色とりどりの宝石が乗つっている。

「二つだけだ。選びな」

「さてはお前偽物だな？ 本物をどこにやつた！」

「本つ当に失礼なガキだなテメエはよお!!」

「冗談だつて」と言いつつ、ダダンの手から紫の宝石粒を二つゲット。初めての作品だし、目の色は俺とおんなじ色にしとこう。手のひら大の狼にはこれが丁度いい。ちよちよいと作り直せば、紫に輝く両目を持った狼の完成。うんうん、なかなかいい

んじやないの？ 我ながらいい出来だと思う。裏には小さく Luke の頭文字である L を刻んである。俺の記念すべき第一作目だ。

俺は出来たばかりの狼を、ダダンに差し出した。

「なんのつもりだい？」

「宝石くれたからこれ、ダダンにあげる。俺の記念すべき第一作目だから大事にしてね」「こんなもんどうしろってんだ……」

とかぶつくさ言いつつ受け取ってくれるダダン。何だかんだ言つて根は優しいよね、ダダンつて。近くにいたドグラとマグラがにこにこしてるのが印象的だつた。

次の日、俺はその辺のチンピラからちよろまかした宝石を、能力で造つた置物に埋め込んだりと細工を施して、中心街に売りに行つてみた。今日はサボと一緒にだ。

エースヒルフィは「売りにいくならついでに強奪するか」とか言つてたので置いてきた。これから取引先になるかもしれないのにそんなことしたら、二度と買い取つて貰えなくなるから却下。容赦なく置いてきた。

「どれぐらいになるかな？」

「さあ？ でも元の値段より下がるつてことはないんじやねえか？」

店の最低条件は、買取価格をケチつたり、誤魔化したりしない店。いくつか店を覗いて、良さそうな店を物色する。

やがて見つけたのは、中心街の隅っこにひつそり立っている古い骨董屋だつた。奥のカウンターには頑固そうな白髪のおじいさんが一人。

「いらっしゃい。……何だガキ共。うちの店には金目のもんなんてないぞ。帰んな」「おれたちのこと知ってるんだな」

「有名だからな、お前らの悪ガキつぶりは」

心底どうでも良さそうな顔で、おじいさんはそう言つた。木造の置物を布で丁寧に拭いているおじいさんのカウンターの前に、持ってきた置物を三つ並べる。

「これ、拾つてきたんだ。買い取るとしたら幾らになる?」

「……宝石はいいな。だが他が駄目だ。てんでなつてない。こんなもん買い取れないな」

「なつ！」

何か言いかけたサボを手で制する。正直、こうなることを予想してなかつたわけじやない。寧ろこうなるだろうとは予測出来てた。

「おじいさん的には、どこが駄目だつた?」

「小僧が作つたわけでもないだろうに、それを知つてどうする」

「ごめん。拾つたってのは嘘。俺が造ったんだ」

「そう言うと、おじいさんはまじまじと俺を見下ろした。

「金がほしいだけならこれまでと同じように振る舞うといい。おれはガキに付き合つて
られるほど暇じゃないんだ」

「稼ぐ手段が欲しい。それに、こういう作業は好きだから」

これは本音だつた。俺はまだ自分の将来を決めきれてないけど、稼ぐ手段を持つてお
くと将来必ず役に立つ。それに能力の練習にもなるし。

沈黙が場に満ちる。暫くして、おじいさんはため息を一つついた。

「細かい箇所が難。誤魔化せばいいと思つてるのが見え見えだ。もつと丁寧に仕上げ
ろ。これ全部だ。それと木の痛みが酷い。何をつかつてもいいつてもんじやない」

「木材はどんなのがいい？ この店に置いてるなら買うけど」

黙つて指さされた先に、小さめの四角に切られたブロックが積んであつたので、一つ
買った。値段はそんなに高くはない。

俺は机の上の置物を持つてカバンに丁寧に仕舞つた。ブロックは風呂敷に包んでも
らつたので、それを担ぐ。

「ありがとうございます。また来る。行こうサボ」

店を出てから、家に帰るまで、サボは俺の造つた置物を見て不満そうにしていた。

「おれはルークの造った置物好きだけどよ！　あのじいさんの言い方はないだろ」「はつきり言つてくれた方が、後々為になるしいよ。怒つてくれてありがとなサボ」「ん。まあいいけどよ……この三つ、どうするんだ？」

「うーん……あ、宝石くり抜いて海賊貯金に入れといてもいいよ」

「そんなことしねえよ！」

結局、ダダンの家の棚に飾ることにした。地味に皆から人気が出てて、製作者としては嬉しい。こつそりドグラとマグラが教えてくれたが、俺が最初に造った紫の目の狼は、ダダンの部屋の机に飾つてあるんだとか。

それを聞いてからにこにこ顔でダダンを見ていたら普通に気持ち悪がられました。悲しみ。

果てを望む

毎日チンピラを襲つた後にせつせと置物を造つておじいさんの元へ持つてつてを繰り返し、やつと買い取つてもらえるようになつてきた数日後。

俺たちは今日も四人仲良く食い逃げをかましてきたわけだが、逃げている最中、サボが一人の男に呼ばれているのを聞いた。

今では一緒に生活しているが、これまで数年間一緒に海賊貯金を貯めていたエースも俺も、そしてルフィも、サボが俺たちと出会う前に何をしていたのかは一切知らない。興味を持つのは当然の事だつた。

「あの男は何だよ。お前を呼んでたよな。一体どういう関係だ？」

いかにも不機嫌といったエースの低い声を聞いて、サボの表情に僅かな緊張が走つた。

「別に……何の関係もねえよ」

「おれたちの間に秘密があつて良いとでも思つてんのか？ それは大きな間違いだぜ、サボ……」

「エースの言う通りだ。さあ、とつと吐いちやいなよ。楽になるぜ？」

「うだぞ、吐け！」

「だから、何もねえって！」

エースとルフィ、そして俺の三人は今現在、森の外れ、海を一望出来る場所でサボをぐるりと囲んでいた。エースとルフィは二人揃つて不機嫌。サボに隠し事をされているのが気に食わないらしい。俺は不機嫌と言うよりは、寂しさの方が勝るかな。ただ、やっぱり気になるので大人しく諦めたりはしない。

「サボ…俺たちには、言えないようなことなのか……？」

「……っ!!」

俺はとびきりの濡れた子犬の様な顔をして、サボに悲しげな声を投げかけた。顔も声もかなり頑張つてみたが、効果はどうだろうか。……我ながらちよつとどうかと思わなくもないけど、しようがない。だつて気になるんだから。この溢れ出る好奇心には勝てなかつたよね。私、気になります！

「あいつは……父親だ」

「は？ 誰の？」

「おれだよ」

「で？」

「お前らが質問したんだろ!!」

「ほーん。そうだったのか」

「お前も聞いたわりには適當だなルーク！」

「適當じゃないよ。色々考えてるところ」

貴族出身のサボがわざわざゴミ山に来るなんて、普通じや考えられない。なら、それ相応の理由があつたんだと思う。

「お前らにはウソをついてた。ゴメンな」

「謝つたからいいよな!! 許す！」

「俺も別に気にしてないし、いいよ」

というか俺は親すらよくわかってないからな。どつかの島に置き去りだつた俺（推定0歳）を、じいちゃんが拾つてダダンに預けたつてだけで。まじこの世界やべえ。俺は黒髪に紫の目だけど、紫の目つてこの辺りじや見ないから、誰が親かなんて皆目検討もつかない。きやはつ☆（思考放棄）

まあ俺自身、誰が親とか興味ないから、サボが誰の子どもとかどうでもいいけど、エースにとつては違つたらしい。サボに背を向けている。

「コトによつちやおれはショックだ。貴族の家に生まれて……なんでわざわざゴミ山に」

「…………!!」

サボが言いづらそうに顔を伏せる。優しいサボは、親のいない俺たちには言いにくいだろうな。

「…………まあ、そう言うなよエース。親がいるからって幸せだとは限らないよ」

……どんな形であれ家族を知っているからこそ辛い思いをすることだつてある。最初から持つてないものには何の感情も抱けないと同じ。持つてるからこそ味わう悲しみもある。

「ルークの言うとおりだよ…………あいつらが好きなのは「地位」と「財産」を守っていく誰かで、おれじゃない。おれの居場所なんて、あの家にはなかつた」

サボの目は暗かつた。

「お前らには悪いけど…………おれは親がいても”一人”だつた。貴族の奴らはゴミ山を蔑むけど…………あそこで何十年先も決められた人生を送るよりいい」

「…………そうだつたのか」

ぱ、と顔を上げたサボの表情に暗さはもうなくて、かわりに笑顔を浮かべていた。

「なあ、エース、ルーク、ルフィ！　おれ達は必ず海へ出よう！　この国を飛び出して、自由になろう！！　広い世界を見て、おれはそれを伝える本を書きたい！　航海の勉強なら全然苦じやないんだ。そして、もつと強くなつて海賊になろう！」

「ひひ！ そんなもんお前に言われなくてもなるさ!!」

サボの言葉を聞いたエースが、海に向かって叫ぶ。

「おれは海賊になつて勝つて勝つて勝ちまくつて、最高の名声を手に入れる！ それだけがおれの生きた証になる！ 世界中の奴らがおれの存在を認めなくとも、どれ程嫌われても!! ”大海賊”になつて見返してやんのさ!! おれは誰からも逃げねエ！ 誰にも負けねエ！ 恐怖でも何でもいい！ おれの名を世界中に知らしめてやるんだ!!」

すごい目標だ。スケールがデカくてびっくりしたけど、エースなら叶えられる。そん

な気がする。

ルフィも目をキラキラさせて、海に向かつて声を張り上げる。皆大きな夢があつて、聞いてると俺までワクワクさせられる。

「おれはなア!! 海賊王になる!!」

「は?」

「いいじやん、海賊王」

「なつはつはつは！ そうだろ？」

誰よりスケールが大きかつたルフィの夢に、エースとサボが二人揃つて口をぱかんと開けた。海賊王と言えば、それはゴールドロジャードを示す通称だ。

「お前は……何を言い出すかと思えば……」

「あははは、面白エナルフイは！　おれお前の未来が楽しみだ！！」

「にしし！　なあ、ルークは将来どうするか、決めてるのか？」
「俺？」

三人の視線が俺に集中する。少し前まで、俺は将来の夢とか決めてなかつた。やりたいことも思い浮かばなかつた。それはきっと『今』が楽しかつたからだ。でも、もうそれを自覚出来た今、やりたいことは決まつてゐる。

「まだ決まつてねえなら、これからゆつくり決めればいいさ。おれ達はお前の選んだ夢なら応援するからよ」

「いや、いいよ。俺も海賊になる。今、決めた」

多分、ありふれた夢だと思う。前世での日本なら誰しも一度は考えたことがありそうな、そんな夢。

俺は幸運なことに、それを目指せる環境にいる。なら、俺は自由に冒険してみたい。気心しれた仲間と一緒に、この目で世界を見てみたい。

「この国にいても何もやることなんてないんだ。なら、あちこち自由に冒険して、この海の果てを見てみたい」

「ルーク、お前……！」

「まさか、じいちゃんみたく止めたりしないよな？」

どこか嬉しそうなエースにニヤリと笑いかけると、エースもニカツと笑つた。

「ンなわけあるか！　お前も歓迎するぜ、おれの船に!!」

「ああ、よろし……」

「言いかけたところで、サボが「ちよつと待て！」と叫んだ。何だ何だどうした？」

「エース、おれ船長やりたいんだけど」

「おれもだぞ！」

口々に騒ぎ出すサボとルフィに、エースが頭をかいた。

「え？　ルフィはまあわかるが……サボ、お前もか。思わぬ落とし穴だ。お前はてつきりウチの航海士かと」

「お前らおれの船に乗れよー」

ふむ、なりたい役職が被つてゐるのか。船長でいいのなら……。俺は思わず口を挟んだ。

「君らは仲良く一つの船に乗るという道はないの？　ほら、三大船長みたいな感じでさ」「嫌だ」「嫌だ」

「お……何ということでしょう。ここに来て主張がバラけだしたぞ。俺は船長とかそういうこだわりないけど、他の三人はどうやら違うらしい。ごちやごちや言い合つていたけれど、結局それぞの船の船長になることで落ち着いた。いや、まあ俺も三人と

一緒に海賊やれるとは思つてなかつたけどね。

「ルークも船長になんのか？」

「いや、俺は別に船長じやなくとも「ならおれの船に乗れよ！」「いーや、おれの船だろ」「お前ら馬鹿言つてんじやねえよ。おれの船で決まりだ！」……おーい、ちょっと聞いてる？」

もみくちゃになつて俺を取り合つている三人。

「おれの船に来れば、ルークは飢えさせねえ！ 毎日腹いっぱい食わせてやる！ 絶対にだ!!」

「そんなの当然のことだろルフィ!? おれと来ればルークに海の果てを見せてやれる！」

「いいか！ おれならルークの望むもの全て用意する。絶対後悔させねえし、あいつの夢も必ずおれが叶えてみせる!!」

思い思いにわーわー騒ぐ三人を見て、思わずため息をついた。いや、皆俺のこと真剣に考えてくれて嬉しいよ。嬉しいけど……。

こういう時、普通に介入したら巻き込まれるのはこの数年間でわかってる。俺は片手を地面についた。

「わっ!」

「ぶへつ！」

「おわあつ!?」

走る青雷。たちまち地面からせり上がった1メートル程の高さの土壁が、もみくちゃの三人をあつという間に引き離した。ふふん見たか、最近は毎日置物造ってるからな。破壊の細かい調節も創造スピードも上達してるんだぜ？

ついでに懐も潤つてきてる。海賊貯金に出来る分も、チンピラから巻き上げてただけの前より増えつつある。芸術品って以外と高く売れるんだよな。

「お、お前いつの間にそんなに速く能力使えるようになつたんだよ」

「俺だつて日々成長してるんだ。近いうちに組手の戦歴も塗り替えてやる」

本気だ。ただ追いかけるだけじゃないぞ、俺は。歯を見せて好戦的に笑つた。

ちなみに俺はエースとサボに負け越して。能力ありと無しの状態で分けて組手してたけど、能力ありなら勝てることも偶にあるけど、無しだと全然勝てない。「し、身体能力お化け（虚無）」つてなつていつも負けてる。悔しい。

ルフイにはどつちの状態でも勝ち越してると、それはルフイが能力を使うことにこだわってるから。ルフイが能力を使いこなせるようになつたらわからない。ゴムの身体は打撃を全部無効化するからな。今のところはまあ……自滅してばかりだけど。

「……それと、乗る船だけど。今から俺が言つたことに当てはまるやつの船に乗るから

!

「「!?」」

「よく聞いて、考えて。自分が当てはまると思ったら手をあげて元気よく返事してね。はい、じゃあ……」

緊張した面持ちの三人に、俺は無慈悲に告げた。

「この中で一番、自分が死にやすいと思う人！」

「はあーっ！ んぐ！」

エースがフライング気味に手を上げかけて、瞬時に下ろした。開きかけた口をしつかり噤んでいる。

口を噤んだエースとサボが目を合わせて、流れるような動作でルフィを見た。ルフィはそれに気づいてない。エースとサボがじつと無言で俺を見たので、一つ頷いてみせる。

俺の言いたいこと、伝わったみたいで何より。

「やめだ」

そつとエースが戦いの終戦を宣言した。そして俺に言う。

「ルーク、ルフィを頼むな」

サボが優しい目をしてルフィを見る。

「ルフィイ、ルークにあんまり無茶させないようにしろよ？ 船員を守るのが船長の仕事だからな？」

「？ わかった！ じゃあ、ルークはおれの船に乗るんだな!?」

「ああ。一緒に頑張ろうな、ルフィイ船長」

「やつたー！」

こうして、俺が乗る船が決定した。エースとサボは残念そうにしていたけど、ルフィイを一人には出来ないという結論に至つたらしい。だつて多分、ルフィイ一人で海に出たら色々と大変なことになるよ？ カナヅチだし。いや、カナヅチは俺もなんだけどさ。

それから、俺達四人で酒を飲んだ。何でも、盃を交わすと”兄弟”になれるという。所謂兄弟盃つてやつだ。これで俺達四人は、切つても切れない強固な絆を持つ兄弟だ。

「たとえ何処にいようと。それが世界の裏側でも。お前らはいつもおれと一緒だ。おれ達四人はずっと兄弟だ」

そう言つたエースが嬉しそうで、俺も何だか嬉しくなつた。どうか。今日から俺達は兄弟か。前からぼんやりと自分達の関係性を考えて「兄弟がいたらきつとこんな感じ」とか考えてたから、こうして正式に兄弟になつたことがたまらなく嬉しかつた。きつとそれはサボとルフィイも同じだ。

意味もなく笑いがこみ上げてきて、暫く四人で馬鹿みたいに笑いあつた。

帰りに野牛を二人で一頭ずつ仕留めてダダンの家を目指して引き摺つていると、一緒に引き摺つていたエースが言つた。

「そういやさつき言つてたけどよ。お前、親を探したりはしねえのか？」

「……産んでくれたことには感謝してるけど。探しはしないかな。俺はじいちゃんに拾われてこの島に来てよかつたと思つてるから」

「なんでだ？」

「お前達に会えたから」

俺の名付け親が実はエースだつてこと、知つてゐるよ。じいちゃんがつけ忘れてたらし
い名前をダダンの家で皆で考えて、当時3歳だったエースがつけてくれたつて。……と
いうかじいちゃんは名前つけ忘れるとかヤバいだろ。まあ、そのおかげで俺は今『ルー
ク』つて名前を名乗ってるんだけどさ。

「……そうかよ」

「そうだよ。何、照れてんの？」

「は？ 寝言は寝て言え」

「寝言じやない。本心」

「……」

「ゴメンて。怒るなよー、兄ちゃん！」

無言で歩くペースを早めたエースを、俺も早足で追いかけた。

愛（暴力）

いつものように骨董屋に置物を売りに行つた時に、俺はおじいさんが読んでた本に見覚えのあるものを見つけてしまった。

おじいさんが読んでいたページ。ひび割れが走り、半分は赤、半分は青に光る奇妙な梨のイラストが目に入つて、思わず二度見した。いいい、今のつて……。

「お、おおおじいさん！ それちよつと見せて！」

「？ 何だ小僧、とうとう本性を現したか」

「いや違うから、ちよつと読ませてもらうだけだから！」

おじいさんから本をぶんどう……お借りして、俺はさつきのページを開く。やつぱりこれ、俺が食べた実だ。

これは『マテマテの実』。食べた者をマテリアル人間にする悪魔の実……だつてさ。分類は超人系。パブリミシア手で触れた物質を材料に『創造』する、または『破壊』する能力。マテリアルって、確かに物質や材料を意味する言葉だつたはず。

「何だ、小僧もこの悪魔の実が気になるのか。おれも食うならこの実がいい。便利そんな能力だからな」

「便利だよ実際。クソ不味かつたけど」

「あ？ 何だつて？」

「何でもない」

思わず普通に感想とか言っちゃつたけど、おじいさんには聞こえてなかつたっぽい。胸をなでおろして続きを読む。

とうやら俺があの日食べた実は、結論で言えばアタリだつた。手で触れたものを元にしてイメージした通りの物を創造する、または破壊することが出来る能力。かなり使い勝手がいいし、俺も気に入ってる。いろんなことに使えるしね。

ただ、弱点が一つある。それはズバリ、光だ。

この能力の最大の特徴は、能力発動時に起こる干渉光と呼ばれる光だ。創造する際は青く、破壊する際は赤く光るあれね。あのパチパチ鳴る雷みたいなやつ。

あれ、能力発動中に出したり消したりなんてのは出来ないらしい。だから、対峙する相手に干渉光の色で「破壊」か「創造」のどちらの攻撃が来るかを予測される可能性がある。というか確実にさ^{モー・ショーン}れる。

能力を使う際の予備動作とでも言うべきか。これはかなり痛い。

「もう読まないんだな？」

「あ、ちょっと待つて。他の実のこととか書いてない？」

「あー？」

おじいさんがどこかに持つていこうとしていた本をもう一度借りて開く。が、他の実の情報は書いてなかつた。……というか、これ。どこかの風景や動物の姿が無造作に書かれていたり、かと思えばつらつらと文章だけを綴つたページもある。旅費の計算がされたようなページも。ページを何度も繰り足して、一冊の本みたいに革紐を通してある。これはきっと、誰かの旅の記録だ。

「これ、日記？」

「ああ。そいつはおれの日記だよ。おれは探検家だつたからなア。相方と二人、あちこち旅してまわつた」

懐かしそうに目を細めて「昔の話だ」と言いながら俺の手から日記を取り上げたおじいさんが、それをカウンターの上に丁寧に置いた。

他に悪魔の実に関する情報があるなら調べておくべきだ。絶対に。

「ね、悪魔の実について書いてあるのはその日記だけ？ 他にあつたりしないかな」

「実について書いてあんのはこれだけさ」

何だ、そうなのか。がつかりした俺の様子におじいさんは首を傾げていたが、やがて

思い出したようにカウンター上に置かれた革袋を掴んだ。

「今日は良い出来だつた。お前の金だ。持つていけ」

「このおじいさんは絶対に甘いことは言わないから、良い出来だつたのは本当なんだろ
う。褒められたのはちょっと嬉しい。」

差し出されたずつしりと重たい袋を受け取る。このおじいさんは口は悪いけど、俺への代金をちよろまかしたりはしない。一度ダダンの知り合いに頼んで、俺が造つた置物の相場を見てもらつたから間違いない。俺達は悪童として有名だから、おじいさんの俺への対応は本当に意外だつた。

「おじいさん、俺が悪ガキだからってちよろまかしたりしないよね。何で？」

「あ？ ちよろまかしていいのか？」

「いや駄目」

「なら黙つてろ。用が済んだならさつさと帰れ」

「はーい」

俺の疑問には答えてくれなかつたけれど……悪い人じやないんだよな、この人。

帰つて早々に兄弟達に俺の能力について報告した。俺の話を聞きながら、腕を組んで

難しそうな顔をしているエースとサボ。この二人は兄になつてから一段と団結力が増した気がする。頼み事をしても、昔に比べてやる気が凄い。俺とルフィという弟が出来たから、頼られたいお年頃なのかも。

「光を見ての攻撃予測はおれ達もやつてたけど、やっぱ光は消せねえのか。なら、予測されても対処できる立ち回りが出来るようになればいい」

「海賊として名を上げれば、いずれ能力は知られるんだしな。どのみちいつまでも隠せるもんでもねエんだ。要は、相手に知られていてもそれを叩き潰せるくらいにルークが強くなればいいって話だろ」

サボとエースが交互に言つて、拳を俺に向けた。待つて、何なのその構え。嫌な予感しかしない。ジリジリと後ろに下がる。

「ルフィ！　お前は審判な。今日から二対一での組手もやるぞ」

今なんか聞こえた気がする。二対一？　いや能力ありでも勝てない身体能力お化け二人に俺一人は厳しいと思うんだ。

「ええー、審判～？」

ルフィがつまらなさそうな声を出した。二人ともわかつてないな、俺とルフィはいざれ同じ船に乗るんだから、今のうちに連携出来るようにしておくべきだ。

「来てくれルフィ！　的が増えたほうがダメージは分散……将来同じ船に乗るんだか

ら、共闘の経験積んどいた方がいいだろ!!」

「そうだな！ よし、おれも……的!? 今的って言つたか!?!」

「ルフィイ、審判やるならこの干し肉やるぞ」

「審判やる」

「ルフィイいいいい!!!!」

俺の叫びを皮切りに、サボが先行して突っ込んでくる。

「おりやつ！」

掛け声一閃、斜め下からの蹴りを半身引いて躱す。流れるような拳打をいなし、弾く。

「どうした！ 能力は使わねえのか？」

「こんにやろー……！」

サボの攻撃を捌くのに精一杯で、手を地面につく暇がない。

何とか距離を稼ごうとして——不自然に地上の木漏れ日が陰る。反射で横に飛ぶ。

「上っ！ から、かよ！」

頭上からの踵落としを横にゴロゴロ転がつて避けた。放った張本人、エースが傲然と笑う。

「成長してんだろう、能力！ なら今ここで見せてみろよ！」

「そうかそうか、成長しておるのか」

俺の後ろから、この場で聞こえないはずの声がした。い、いいい今のは幻聴だ、そ
うに決まつて。

ビシリと固まつたエースとサボ。審判役のルフィがあんぐりと口を開ける。

「じ……じいちゃん……」

「おう。三人とも元気じやつたか？」

ゆつくりと振り返る。アロハシャツを着た暴力ジジイと目があつた。奴は俺達に向
けて親しげに手を上げている。

「……じいちゃん？ もしかしてこの人、お前らのじいちゃんか!?」

「ん？ 何じや小僧。三人の友達か？」

「ああ！ おれはサボ。よろしくな！」

「おお、そうかそうかサボと言うのか」

じいちゃんと会うのが初めてらしいサボが、フレンドリーな様子でじいちゃんに近づ
いていく。正氣か？ ジジイの隙を伺つている俺達は、それを黙つて見つめることしか
出来ない。

じいちゃんも孫達に友達が出来たのが嬉しいのか、機嫌良さそうだ。逃げるなら今、
このタイミングしかない。

前回無言で逃げた時は散々な目に遭つたので、今回はじいちゃんが納得出来るよう

な、これ以上ないくらい完璧な言い訳をちゃんと事前に考えてある。過去の自分に拍手したいくらいだ。

「なんか急に走りたい気分になつてきた。ばいばい」

「急に腹減ってきた。またな」

「ダダンに頼まれた仕事忘れてた。じやあな」

それぞれ考えた渾身の台詞を言い残すと、俺達はサボを置いて一目散に走り出した。ルフィとエースも一緒だ。ごめんな兄弟サボ、お前のこと是一生忘れないから。

「高町を目指せ！ 俺の予想では、あそこまでジジイは追つてこない！」

「なるべく痕跡を残すな!!」

森に逃げ込み、立ち止まらずに走り続ける。目指すのはゴミ山を越え、中心街を抜けた先の高町だ。俺の予想では、あそこまでじいちゃんが探しに来ることはほぼ無い筈。海軍の英雄と言えど、貴族の暮らす町で暴れることは出来ない（そう信じたい）。

その時、背後からじいちゃんの怒号が響いた。

「まずいぞ、**囮**サボが機能してない!!」

俺の想定ではあと10秒は持ちこたえてくれる筈だったのに！ エースが鬼気迫る形相で怒鳴った。

「止まるな！ 恨みつけなしだバラバラに逃げろ！ 他がやられてる間に助かるかもし

れねエ!!」

領きあつて、それぞれ別の方向に別れる。捕まつたら、なるべく時間を稼ぐ。これは俺達の約束だつた。一人でも多く仲間を逃がす為の。

数秒後、俄にわかに森が騒がしくなる。誰かの悲鳴が聞こえた。……この声は、ルフイ！捕まつたのか！ 健気にも時間を稼ごうとするルフイの声が聞こえてくる。

「お、おれ腹が減つたんだつてじいちゃん！ さつき美味そうなイノシシがいたから一緒に——み。ツ」

——ルフイがやられた。静かになつた森にギリ、と俺が歯を噛み締めた音が鳴る。次の犠牲者はエースか、それとも俺か。

「……捕まるわけにはいかない。何としても辿り着くんだ」

「ほう。どこへ行くつもりじゃ？」

「?!」「クソあ！ 早すぎんだろうが！」

横向いたらじいちゃんの顔がドアップになつてた。どんなホラー映画だよ、怖すぎて一瞬呼吸が止まつてた。畜生、痕跡を隠しながら逃げてきた筈なのに、何で見つかつたんだ。ダミーの痕跡まで造つたのに！

ここまでだ。その場で足を止めた。俺はもう助からない。だから、今からはエースが逃げるための時間を稼ぐことだけを考える。

じいちゃんの腕には白目を向いたルフィが抱えられている。次は俺の番だと考える
と震えが止まらない。

「クソじやと？ ルークお前、今じいちゃんに向かつてクソと言ったのか？」

この瞬間、かつてないほどのスピードで俺の脳みそが働き出した。この危機を乗り越
えるために俺の脳みそが弾き出した答えは――

「草生えすぎだろ」って言つたんだよじいちゃん。やだな、俺がじいちゃんに向かつて
クソとか言うわけないじやん。酷いな、俺傷ついたよ」

「おおすまんな。儂の聞き間違いじやつたか」

「あはは。じいちゃんつてばボケるのはまだ早」

「――とでも言うと思つたのか？」

「――ツツ!!」

恐ろしいスピードで落ちてきた拳骨を本能で回避する。巻き起こつた風が俺の髪を
逆立たせた。じいちゃんを相手にした時、頼りになるのは本能だけだ。

「お前達はいつもいつも、儂の顔を見る度に逃げ出しあつて……」

「俺は急に走りたくなつただけだし、ルフィは急に腹が減つただけだよ。じいちゃん
だつてよくあるでしょ、そういう時」

「確かにしょっちゅうあるが……それで騙されると思つどるのか？ 儂は悲しいぞ」

くそ、この言い訳は駄目だつたか。てか、会うたびに殴るんだから逃げられて当然で
しようよ。何で孫達に逃げられてるのか、もつと自分の行動を振り返つてほしい。

「俺も毎回殴られて悲しいよ」

「そうか。どうやら儂の愛は通じておらんようじやな……」

「暴力という名の愛ならいらぬ」

そろそろエースはゴミ山くらいまでは辿り着いたろうか。冷や汗を拭う。目を細めたりじいちゃんが、大きなため息をついた。

「今はそうかもしけんな。だがしかし、お前も大人になればわかるじやろう。儂の愛の大ささをな——どれ、そろそろエースを捕まえにいかんとな。エースの気配は……あそこか」

！　またこれだ。何故か毎回、どこに隠れていてもじいちゃんには居場所がバレる。氣配がどうのこうの言つてるけど、じいちゃんは能力者じやない。海で泳いでるの見たことあるし。たしか「ハキ」がどうのこうの言つてた気がするけど、それは今はいい……今俺に出来るのは、一秒でも多くの時間を稼ぐことだけだ。

「簡単には行かせな——ぱみんっ!!」

ごめんエース、無理だつたわ。頑張つて逃げて。
目で追うことの叶わない一撃。頭部に走つた衝撃に、視界が一気に暗くなつた。

A
S
L
L

誰かに身体を揺すられている。結構雑な揺らし方。後頭部に鈍い痛みがある。もしや俺、人攫いに狙われてる？ そこまで考えて、一気に意識が覚醒した。俺は知ってるんだ、人攫いは総じて持ち金が多いってことを。絶対に逃さない。

「金目のモン置いてけやあ！」

相手の顔があるであろう場所にピンポイントに拳を付き出す。だが、殴った感覚がしなかつた。あれ？

「うつわ、完全にエースと同じ起き方」

「はあ？ あれ、サボ？」

起き上がりると、呆れた顔のサボがいた。近くにはエースヒルフイもいて、二人とも何故か頭を氷嚢で冷やしている。いつの間にか、ダダンの家に戻つてきただらしい。大部屋の隅っこでダダン達が怯えているのが見える。

氷嚢とダダン達の様子で思い出した。そうだ、俺はじいちやんに殴られて……！

「起きたか、ルーク」

「最悪の目覚めー！！ ……嘘だよじいちゃん。冗談だから泣かないで」

「泣いとらんわい。起きたなら外へ行くぞ。お前達の成長具合を見る」

エースとルフィイが露骨に嫌そうな顔をした。サボも苦笑している。彼は俺達に囮にされたことを最初怒つていたらしいが、意識を失つて帰ってきた俺達を見て怒る気も失せたそうだ。

「ううう、じいちゃんはサボに何かするよりも速く俺達を捕まえに動いたから、サボは今のところ無傷。流石に初対面の子どもを殴つたりしなかつたらしい。外に出て、早速エースとルフィイがヤケクソ氣味にじいちゃんに飛びかかった。それを眺めながらサボと俺は適当な場所に座る。

「サボは器が広いな。もつと怒るかと思つてたのに」

「おれは被害受けてないし、あれ見てたらお前らが逃げ出す理由もわかるからなあ……」

俺達の目線の先では、エースとルフィイが二人同時に投げられていた。全く歯が立つてない。じいちゃんに良いように弄ばれている。

ぼんやり眺めていると、じいちゃんと目が合つてしまつた。カツと見開かれるジジイの目。

「嫌だなあ……」

「なアに休憩しとるんじやルーク！ そんなんじや強い海兵にはなれんぞ!! お前もこつちへ来んか！ サボ、お前もついでに鍛えてやろう。さあ、かかつてこんかい!!」

「あー」

たつた今「こつちへ來い」とか言つたのは誰ですかね？　こつちから行く暇もなく、気
づけばいつの間にかじいちゃんに襟首を掴まれている。

俺、猫じやないんですけどね。これで何回目だろう。もはや抵抗する氣も起きない。
じいちゃんの左手に首根っこを掴まれたまま脱力する俺。

同じく右手に掴まれているサボが目を白黒させているのが面白かつた。

「この人いつもこうなんだ」

「そ、そうなのか。何か納得したよ。お前らの爺さんらしいや」

振り回される直前、俺とサボは最後にそんな会話をした。

「ぶわっはっはっは！　まだまだじやが、なかなかどうして悪くない。腕を上げたなお
前達！」

「俺以外誰も聞いてないよ……」

じいちゃんが褒めてくれたが、意識があるのは俺だけ。周囲に死屍累々と転がる三人
は絶賛気絶中だ。俺も数秒前までは気絶してた。……くそ、力入んない。こりや暫く動
けなさそうだ。

「ねえじいちゃん、ルフィはゴムだよな？」

地面に寝転がつたまま、俺は岩に座っているじいちゃんを見上げた。

……うわ、星空が凄く綺麗。

「ん？ そうじやな。それがどうした？」

「何でじいちゃんの打撃はルフィに効くの？ ゴムなのに」

ちよつとした疑問だつた。ルフィはゴム人間だから、打撃は効かない。俺達が幾ら殴つたところで、ゴムの身体には痛みも無ければダメージも無い。けど何故かルフィはじいちゃんの拳骨を痛がる。単純に力の差かと思つてたけど、それも多分違うよね。

「ふむ……ゴムに打撃は効かんと思つとるのか、ルークは」

「？ 普通に考えたら効かないだろ」

「その「普通」を忘れる。それは強くなるのに必要ないもんじや」

その時のじいちゃんは何故か機嫌が良くて、少し饒舌になつていた。例えば俺達を見て「背が伸びたな」とか言つてくれたり、わざわざ遠くの島から「土産じや」とか言つて何か持つて来てくれたりする時の、少し優しくなる表情と同じ。

「いいカルーク。今はまだわからんでもいい。じやが覚えておけ。どんなに霞のようないすれども「殴れる」と思えば「殴れる」んじや」

「何それ？」

まるで言葉遊びのようだ、何でもはつきり物を言うじいちゃんにしては珍しい曖昧な答えに首をひねる。

「何でもいい。「殴る」「蹴る」「見る」……全て、信じることが大切なんじや。固定観念に囚われないこと。自分なら出来ると強く信じること。よく覚えておけ」

聞き分けのない子どもに言い聞かせるように、じいちゃんは辛抱強く言葉を繰り返した。

「つまりじいちゃんは、信じたからルフィのゴムの身体に攻撃を通せたの?」

「そうじやな」

何だそれ。そんなので強くなれるなら誰も苦労はしない。そう言つて笑おうとしたけど、じいちゃんの目は真剣だった。冗談を言う目ではなかつた。

「誰でも出来ることではない。しかしお前達ならば出来る。何せ、儂の孫じやからな!」「何その根拠のない自信。それに俺、じいちゃんとは血繋がつてないでしょ」

「信じることじや、ルーク」

「……わかつたよ。忘れてなかつたら、いつか思い出すから」

おざなりな返事だつたけれど、それでもじいちゃんは満足げだつた。

じいちゃんが帰つて数日後。

俺達は独立することを決めた。ちなみに言い出しつべが誰だつたかは忘れた。多分誰かが「秘密基地作ろう」的なことを言い出したんだと思う。

独立するにあたつての準備はあつという間だつた。準備と言つても、何せ手荷物なんて無いから、紙に「独立する A S L L」と書いて部屋に置いただけ。ちなみに A S L L は俺達の名前の Ace、S abo、Luke、L uffy の頭文字をとつたものだ。

独立すると決めてから5分もしないうちに準備は完了した。

基地を建てる場所はすぐに決まつた。森の中で一番大きくて太い木の上だ。皆で材料になる木材と釘をあちこちから拾い集めてきて、一からツリーハウスを組み立てた。ここでは俺の能力が大活躍だつたおかげで、二日間でツリーハウスが完成した。

完成したお祝いに美味しい飯をここで食おう！ という話になつて、俺達はそれぞれ思いの「美味しい飯」の調達に向かうことになつた。

調達に向かつてから、大体一時間後くらいかな。基地がある巨木の根本に向かうと三人はもう帰つてきていて、俺が最後だつた。

「皆早くない？」

「遅えぞルーク！ おれはワニ狩つてきたぞ！」

ルフィは狩つてきたと思しき中型のワニをペしペし叩いている。大型じやなれば

俺達はもうワニを一人でも狩ることが出来るようになつていた。一人でワニを狩る子
ども……いや、何も言うまい。

「おれは蛇と魚だ。蛇は蒲焼きにしような」

サボがそう言つて5メートルはありそうな大蛇をズルズルと引き摺つてくる。背中に
に背負つている籠の中には大きな魚が6匹。大量だ。

「脂が乗つてて美味そだな〜！」

「どこでこんなに釣つたんだ？」

「滝壺から少し下つたところだよ。まだまだ居そだつたから、今度皆で釣りに行こう
な」

サボは俺達の中で一番釣りが美味しい。二番目は俺で、三番目はエース。一番下手つ
びなのがルフィ。エースとルフィはじつと待つことが苦手だから、まだ手掴みのほうが捕
れると思う。

ルフィと俺はカナヅチだから、魚を捕る手段があんまりないんだけどね。ちなみに俺
は、追い込み漁が一番得意。

エースが大きなイノシシと、大きな紙袋を俺達の前に置いた。

「次はおれだな。街の店から盗つてきた肉饅頭と、さつき狩つってきたイノシシ。あとお
まけでチンピラから金も巻き上げてきた」

「あれ、エースも街に行つたの？　俺もほら、肉饅頭」

「お？　ルークもか？　しまつた、被つちまつたかな」

おんなじ紙袋を俺も差し出す。前世むかしよく食べてた肉まんそのまんまの味だからか、たまに無性に食べたくなるんだよね、これ。

サボが笑つて言つた。

「被つちまうのもしようがねえよ。だつてこれ美味いし。結構数あるみたいだから、他の肉とか焼いてる間に食おうぜ」

「うん。あ、鹿も狩つてきたよ。それとこれ」

引きずつっていた鹿と、背負つていた麻袋を下ろす。中身は大量のキノコや果物だ。

「いいな！　肉と一緒に焼こう」

ずらりと並んだそれぞれの獲物。こうして見るとやっぱり、肉が多い。エースが苦笑した。

「肉ばつかだな」

「俺達らしくていいじゃん」

それぞれ思い思いのものを持ってきて、それを皆で食べる。何でもないような、たつたそれだけのことでも俺は楽しかった。多分、今日誰がどんなものを持ってきても俺は同じ様に笑つたはずだ。

俺にとつてエース、サボ、ルフィとの日々は、いつしか当たり前になつた。この先も
ずっと、続していくと思つて疑わなかつた。
約束された未来なんて、どこにもないと知つていたのに。

奪還

その日は突然、何の前触れもなくやつてきた。俺達は街で食い逃げして、チンピラから金品を奪つた。それはいつも通りの、少し殺伐とした日常だつた。いつも通りなら、俺達は今頃その日の夕飯を皆で調達するはずだつた。

「サボが、父親に連れて行かれた……？」

街から戻つた俺を待つていたのは、エースとルフィの暗い顔だつた。場所は秘密基地。夕焼けが景色を赤く染めている。

落ち込んだ様子の二人に話を聞くと、ゴミ山にいたエース達の元に、急にブルージャムとサボの父親、そして銃で武装した部下達がやってきて、サボを拘束。そのまま連れ去つていつた。二人はその後荷運びの仕事を頼まれたけれど、そんな気分じやないと言つて断つたらしい。

話を聞いている間、すつと指先が冷えていく感覚がした。エースがぽつりと言つた。

「……ブルージャムに言われた。貴族に生まれるつてことは、幸福の星の下に生まれる事だつて」

「……」

「でも、おれはサボがいねえとイヤだ
ルフイがぼしよりと言つた。

「おれだつてそうさ……！　でも、おれ達は兄弟だけど……、本当のサボの幸せが何な
か、おれはわからねえ」

どこまでも突つ込んでいくあのエースが、真剣に悩んでいる。そうだよな。大事な兄
弟だもん。俺もいろいろ考えなきやいけないけど、その前に一つ、聞かなきやいけない
ことがある。

「なあエース

「何だ？」

「……サボは、どんな顔してた？　迎えが来て、何て言つてた？」

声は震えはしなかつたし掠れもしなかつたけれど、淡々としていた。内心はとつ散ら
かつてるのに、意外と落ち着いた声が出て自分でもびっくりして
目が合う。エースは目を見開いていた。

「サボは、喜んでた？」

「……あいつ、泣いてた」

そつか。サボは泣いてたんだね。

俺が何か言うよりも早く、座つていたエースが立ち上がる。

「迎えに行こう。サボにとつての幸せは、きっと^{あそこ}高町には無い」

「うん、そうしよう」

「やつぱりおれ達にはサボがいねえとな！」

エースとルフイの目に力が戻つた。やつぱりこうじやないとな、俺達は。あと一人、多分フニヤけてるであろう兄弟を迎えて行く為、俺達は準備を始めた。

腹が減つては戦は出来ぬ。というわけで、俺達は焼いた肉や魚を頬張りながら作戦会議をしている。

もうすっかり夜は更けていて、揺れる焚き火の炎だけが周囲を照らしていた。とは言つても、月が出ているのでそれほど暗くはないんだけどね。なんだか風情があつていい。サボともこの景色を一緒に見たかつたな。

サボの父親は貴族だと聞いている。貴族なら家は高町の方にある筈。高町は全体を高い石壁で囲まれている為、高町に行くには銃を持った見張りのいる検問を抜けないと

いけない。しかしそれは却下だ。俺達は顔を知られているから、まず通してもらえることはない。

なので、石壁をぶち壊すこととした。
地中にトンネルを造ることも考えたけど、まだ俺の能力にはそこまでの練度がないことと、石壁の重みでトンネルが潰れてしまうかもしれないから却下した。生き埋めは嫌だ。

「三人だと目立つから、高町に入るのは俺だけだ。二人には中心街で騒ぎを起こして、警備員達を引きつけてほしい。その隙に俺が壁を破壊して侵入する。サボを連れ戻したら一緒にそつちに合流して、撤退する」

問題はサボの家を見つけないと困る。少し手間取るかもしれない。どうしても見つけられなかつた場合は貴族の家の壁を片つ端から破壊してサボを探すことにした。これでも見つけられなかつたら、これからサボが見つかるまで毎日通うことにする。

「それはいいけどよ。ルーク一人で平気か？」

「逃げ回るのは得意だから大丈夫。能力もあるしね」

もしも追手がいる場合は、人通りの多い場所を選んで逃走する。能力で足止めも出来るだろうし。

「シンプルに纏めるよ。俺は侵入してサボを救出。エース達は中心街で暴れる。OK ?」

「おう」

「わかつた！」

「言いながら、焚き火で炙^{あぶ}つていた魚串を頬張る。身がホクホクで美味しい。いい焼き加減だ。それについても……。」

「……いつも思うけど、俺達の計画つて結構雑だよな」

自分で考えといで言うのもおかしな話だけどね。

「わかりやすくておれは好きだぞ。つてあちい！ あちつ！」

「これに置きな。ほら、水」

熱かつたんだろう、ルフイが焼き上がったばかりの肉をお手玉してるのが見えたので、皿代わりの大きな葉っぱを渡しつつ、水の入ったバケツを差し出す。その様子を見ていたエースが笑った。

「落ち着いて食えよ、ルフイ。それと作戦についてはルフイに賛成だ。難しくて複雑よりはいいじやねえか。救出は明日の夜……日が沈んだ頃くらいでいいか？」

肉に噛みつきながらエースがそう聞いてきて、俺とルフイは同時に頷いた。

「ならこれ食つたら寝るぞ、明日に備えなきやなんねえ」

うん、と返事をしながら、俺はむしやりと魚を骨ごと平らげた。

翌日、俺はエースとルフィと別れ、昼間のうちにある程度の侵入ルートを決めた。中 心街の比較的人通りが少ない場所だ。周辺の街灯は既にこつそりと破壊してあるから、 夜になればこのあたり一帯は真っ暗になる。人工的な明かりに慣れた町の人にはさぞ かし見えにくいだろうな。

時間も着々と過ぎていき、今はもう日が落ちている。そろそろエースとルフィが騒ぎ を起こしてくれる筈だ……。

耳を澄まして静かに待つていると、ざわめきが聞こえ始めた。その方向を見れば、遠 くで二人が暴れているのが見えた。警備員達を引き連れて離れていくエースとルフィ。 ざわめきが遠のいた。ありがとう二人とも！

周囲に人は……いない。よし、待つてろサボ、今行くぞ。

一人気合を入れた俺は、壁を破壊しにかかった。能力を発動して壁に触れる。あつ 待つてこの壁、意外と分厚いわ。能力使つてるからかなんとなくわかるけど、多分壁の 厚さは5メートル近くある。

「ふつ……んぬぬ！」

石壁全てを壊すんじゃない、穴を開けるだけだ。そう、言うなれば貫通させるイメージだ。破壊を示す雷光の赤が強くなる。音がバチバチからバリバリへと、より低い音へ変化する。

壁に触れている手のひらに意識を集中した。駄目だうまくいかない。くそ、自分が考えた作戦なのに最初から失敗するとか笑えないだろ！

「クソが！ 穿孔！ （パークォレイド） なんちやつてえええ！」

脳裏に浮かんだ中二言語を半ばやけくそに叫んだつもりだつたけれど、叫んだ途端ドウン、という鈍い音が響いて呆気なく壁に大穴が空いた。碎けた瓦礫が壁の向こう側に積もっているのが見える。

今ようやく俺はルフイが「ゴムゴムの銃（ピストル）！」とか言つて技の名前を叫ぶ気持ちがわかつた。叫んだらイメージがしつかりするからだ、多分。あと気合が入る。

そろそろと壁の向こう側に渡る。もうもうと上がる土煙に紛れて物陰に隠れ、周囲の様子を伺つた。壁に穴を開けた時に大きな音がしたけれど、夜だからか今のところ人の姿はない。でも、いつ警備員が来るかわからない。

内心ヒヤヒヤしつつ、俺はここで一番大きな家の屋根に登つて高町を観察した。見えるのは過度な装飾が施された無駄にお金のかかつてそうな家ばかり。ちよつとげんなりしつつもあちこち見渡していると、何やら空が赤く染まっていることに気づく。そ

の方角は――

「……ゴミ山、燃えてんじやん」

呆然と呟いてから、やつと飛んでいた思考が戻ってきた。

……ちょっと待つて、あの規模の火事はやばいだろ。あそこには沢山人が住んでる。病気で動けない人も、老人も。まだ幼い子どもだつているのに。エースとルフィが中心街にいることはわかつてはいたけど、それでも動搖を抑えきれなかつた。

「いたぞ、あの子どもだ！」

下から聞こえてきた声に反射的に身を竦めながら、ここが屋根の上であることを思い出して息をつく。

隠れた屋根からそつと顔を出すと、複数の警備員達が一人の少年を追っているのが見えた。鉄パイプを持つ、特徴的な帽子を被つた金髪の少年。間違いない、サボだ。あちこち逃げ回ったのか、息を切らしている。

「エース、ルフィ、ルーク！ ゴミ山から逃げろオ～～～！」

逃げてくれ～～～ッ！！

どれだけ叫んだのか、サボの声は枯れていた。苛立つたように、追手の警備員が怒鳴る。

「諦めろ！ あの光景を見ればわかるだろ、そいつらはもう焼けて死んでるよ!!」

「うるせえ！ おれの兄弟がそんな簡単に死ぬわけねえ!!」

「そうだぞ、勝手に殺すな！」

屋根から飛び降りてクツショーン代わりに警備員を踏みつけると、その衝撃で警備員は氣絶した。目を丸くしたサボがポカンと俺を見る。

「サボ！ 探す手間が省けたよ」

「ルーク!? お前、なんで」

「説明は後！ 逃げるぞ！」

「お、おい、そつちは検問じやないと出られないぞ！ 高町は検問からじやないと出られない！」

「知ってる！」

高い壁を造つて追手を邪魔しつつ、中心街と高町を隔てる石壁の元へ走る。最初に穴を開けたところを遠目で見ると、結構な人だかりが出来ていたから、そこから少し離れた場所へ向かう。

「おいルーク！ エースとルフィはどうした？ ゴミ山にいたりしねえよな!!」

「大丈夫、二人は中心街にいる！ つてかあの火事やばいだろ、なんだよあれ

「偉い奴が来るからこの国の汚点を消すつて言つてた！ 『可燃ゴミの日』つて言つて、

住んでる人ごとゴミ山を燃やすつて……!!」

「イカれてんな。……ひとまずここから中心街に行こう！」

「ここからつて、どうやつて？ というかルーク、お前どうやつてここまで来たんだ？」

追手は全員撒けた。壁の前で立ち止まつた俺をサボが戸惑つた目で見てゐる。

「こうするのさ。^{バーフオレイト}穿孔！」

少しの気恥ずかしさを押し殺して、壁に両手を当てて叫ぶ。イメージが固まつてきたのか、スムーズに能力は発動した。

「なつ……!?

ドウン！ という轟音と共に大穴が開いた壁を、サボがあんぐりと口を開けて凝視した。

「ルークお前、いつの間にこんな……」

「まあ、成長期だからね。それよりサボ」

「何だ？」

これだけは、どうしても聞いておかないといけない。俺達はサボを連れ戻そうとするけど、サボの意思をまだ聞けてなかつたから。

「もしも、サボが家に……両親の元に戻りたいなら、今が最後のチャンス。俺達は兄弟だ。だから、サボの意思を尊重したいって思つてる」

「ルーク……」

「でもその、サボがいなくなつたら、皆釣るの下手くそだから魚を食べられる機会が減るし、組手も二体二で出来なくなるし、エースもルフィも寂しがると思うし……だから

えっと、つまり……行かないでほしい」

そう言うと、サボが目を見張った。

しまつた、つい本音を溢してしまつた。尊重したいとか言つておいて、これは駄目だろ。……でも、しようがないよな。だってずっと一緒にいたんだから。寂しいのは当たり前のことだよ。

「あのなあ、ルーク」

呆れたようなサボの声がして、いつの間にか俯いていた顔を上げる。

「両親の元に帰りたいんだつたら、今おれはお前と一緒にいないよ。おれの居場所はお前たち兄弟のところだ。だから、そんなに不安そうな顔しなくていい」

「——穿パーカーオレイ特オレイト孔ホールオオオ!!!」

壁にさつきのとは比べ物にならない大穴が開いた。サボが目を向いて叫ぶ。

「なんでそうなつた!?!」

「ごめん嬉しくて能力が滑っちゃつた。今なら何でも破壊出来そうな気がする」

「わかつたわかつた、お前が嬉しいのはわかつたよ、だから落ち着け」

「うん。じやあ、二人と合流しようか。丁度向こうから来てくれたみたいだし」

大穴の向こう側で、エースとルフィが手を振っているのが見える。サボは二人を見て嬉しそうに笑つた。